

# 浅野誠旅シリーズ3

## フィンランド(2010年、2011年)

付 エストニア・スウェーデン

2013年11月制作

写真は「冬の宮殿」  
から見たトゥールー  
湖畔

湖の向こう岸は、ヘルシンキ駅などヘルシンキ中央部



# はじめに

旅シリーズでは、「沖縄各地」「台湾・バリ」につぐものだ。

ここ15年ほど、1年にだいたい1回ぐらい海外に出かけている。でも、年齢相応に、だんだんおっくうになり、少しずつ減ってきている。なにか、強い誘いがないと動けなくなっている。いまでも、友人のいるアイルランドやアメリカなどに、いつか行きたいとは思っている。また、大陸中国、韓国、ベトナムなどにはいきたい、と思う。

さて、今回のフィンランドは、フィンランド経済を研究対象にしている娘夫妻の誘いがきっかけだ。誘いがあった時、以前から関心があったので、「渡りに船」で出かけた。2回目は、かれらとの共同研究という要素も多少含めた。その研究報告を含めて、フィンランド学習・発見など文章中心のものは、改めてまとめて、このホームページで紹介するつもりだ。おそらく2014年春のこととなろう。

2010年には、エストニア、11年にはスウェーデンに、ほんの少しだけの旅もしたので、その報告も含める。

いずれも、とても美しい光景にであったので、写真を楽しんでいただきたい。

## 目次

旅日記 2010年9月

P 4

ヘルシンキ街風景      生活風景      岩教会      ヘルシンキ大学植物園  
シベリウス公園      セウラサーリ野外博物館      スオメリナ

キアズマ国立現代美術館　ヘルシンキ南部散歩  
 ヌークシオ国立公園　屋内市場　ウスペンスキイ寺院  
 カイヴォピスト公園　元老院広場　大聖堂　ヘルシンキ大学  
 観光船＝クルーズ船　フィンランド料理　デザイン博物館  
 セウラサーリ再訪　クラフトショップ　学生たちのコスプレ  
 物価・生活　美術作品・工芸品　エストニア首都タリン  
 クラフト展　鬱を直す器具　古風なエレベーター  
 起業を支えるテクノポリス　保育園　植物園再訪  
 湖・中央駅・ベリー　テンペリアウキオ教会再訪  
 ラップランド料理　買物　アモス・アンデルセン美術館  
 土産物　振り返り　滞在型個人旅行のおすすめ

## 旅日記　2011年9月

P 8 0

ヘルシンキ到着と森散歩　セウラサーリ再訪　森歩き・市民農園  
 オリンピック公園　トゥールー湖　ヘルシンキ街風景　冬の庭園  
 柳　花々　トラムの検札　自動車運転　ムーミン絵本  
 フィンランド語　ストックホルム船旅　ストックホルムの建物　鉄道  
 ログハウス展示場　農村風景　扉と表札  
 デザイン見本市　紅葉　変わった競馬　きつつき  
 土産物——サルミアッキ　ぬいぐるみのムーミン　ふくろう  
 　　　　　装飾プレート　花カード　巨大なしゃもじ　工芸品

# 旅日記 2010年9月



## 中部国際空港管制塔 9月6日

今日も暑い愛知県

沖縄、特に玉城は涼しく30℃止まり。しかし、愛知県は連日35℃以上。フィンランドのヘルシンキは昨日12℃。

世界も日本も様々だ。

## ヘルシンキ到着・携帯普通で大苦勞 9月6日

15時前ヘルシンキ空港到着。時差6時間(サマータイム)のため、日本時間は21時だ。

満席のフィンランド航空だが9割は日本人客。しかし、ヘルシンキでは降りず、トランジットでヨーロッパ各地に向かう人がほとんど。

ヘルシンキが、ヨーロッパのなかでは日本から一番近く(搭乗時間は9時間30分)、ヨーロッパ各地への起点になるためらしい。毎日ほぼ同時刻に、成田、中部、関空から到着し、各地への便が接続している。

ヘルシンキで降りる人が少ないので、入国手続きや荷物受け取りなども大変スピーディに進む。飛行機到着から20分で、すべて完了して空港からヘルシンキ中央駅までのバスに乗る。日本の国内線よりずっと早い感じ。

その後、ちょっとした「事件」二つ。

国際対応に切り替えたはずの携帯電話が、「圏外」表示のまま、使えない。先にヘルシンキに来ている娘たちと連絡がとれない。ともかくバスでいく。

迎えにきているはずの娘たちがいない。後でわかったが、携帯電話連絡を待っていたとのこと。

到着したヘルシンキバスターミナルで30分待つ。そして、意を決して、これから滞在するマンスリーマンションめいたところへと動き始める。その途端に、娘たちが現れる。喜びの再会。このまま私がスタートして行き違いになったら、大変なことになっていた。

はらはらドキドキのヘルシンキ生活スタートだ。

余談 ヘルシンキバスターミナルの30分での発見

そこの広い歩道は、スケボー青年たちの練習場。こんなところで練習とは、驚き。

通行する人たちが、胸をはって堂々と、足早に歩いている光景が、健康的に感じる。  
バスの運転手さん。温かみがある親切な対応。途中でおりたお客さんに道案内もしている。  
ここでは、ほぼどこでも英語でやっていけるということは、聞いていたが、その通りのようだ。

楽しみにしていたフィンランド旅。ちょっと長めだし、計画というか、予定がない旅なので、ちょっとした滞在という感じだ。

こんな楽しい旅・滞在に招待してくれた娘夫婦に感謝である。

そこで旅日記を始めることにしよう。

本文中にも詳しく書くが、このブログ投稿に至るには、かなりの苦労話がある。紆余曲折を経て、4日目の9月9日ようやく成功した。

## ヘルシンキ街風景 彫刻像 中央駅

ヘルシンキに滞在し始めたころにとった街風景の写真をいくつか紹介しよう。

### 三人の鍛冶屋像

ヘルシンキ中央の歩道に立つ。街には、こうした像があちこちにある。

さすがデザインの街というべきか



ヘルシンキ中央駅ホーム。近郊通勤列車はもちろん、全国とつなぐ。ロシアのペトロブルグともつなぐ。



広軌鉄路で、ロシアと同じだそう。1917年までのロシア支配時代に鉄道が作られたためだろう。

中央駅としては、割合こじんまりした感じだと、はじめは思ったが、後でそうでないことに気づく。

なかなか広く、十何番線まである。人口五百万で、沖縄の4倍、愛知より少ないということを考えに入れると、すごくでかい。自動車社会の今日にあって、公共交通機関がよく健闘していると思う。





## 私たちのヘルシンキ生活風景

日本との時差は6時間なので、時差ぼけは少ない。  
寒さ対応にしばし苦労しそうだ。5日は12度だった  
そうだが、私が到着した6日は18度あった。でも夕方  
からぐっと冷え込む。

部屋の暖房配管のスイッチをさわってみると、す  
でに暖房が開始している。

ここは、ヘルシンキど真ん中。ヘルシンキ中央駅か  
ら徒歩7, 8分の街中。商店街にある長期滞在用のアパ  
ートメント。最高4人まで泊まれる。前の通りは石畳道で、100-200年以上の歴史を感じる。

### 夕食風景

上写真は、フィンランドでの最初の食事。アパ  
ートメントで娘製作。ウィーン生活をしていたこ  
ろのスタイルだそうだが、彼女が招かれた家での  
食事と似ているとのこと。

黒パンに何かを塗って、チーズ、ハム、トマト、  
キュウリを載せる主食。

そして、野菜スープ

### 右はアパートメントの室内写真

正面がキッチン。食器や調理道具付き。キッチ  
ン上のロフトに2つのベッド。左側のソファを  
広げると大きなダブルベッド。右側にテーブルと椅子



写真にはないが、手前には机とテレビ。写真奥には、玄関、物干場、バストイレ、洗濯機など。

結構快適な空間だ。日本でいうと、マンスリーマンション生活のようなもの。宿泊費が数倍異なるだけでなく、  
外食になってしまうホテル住まいと比べれば、数倍以上の安価で、長期滞在できる。外国暮らし経験のある若い  
人は、なかなかいいアイデアをもっているものだ。

## 生活スタート コンピュータ・インターネット事情

9月7日

午前、港の屋外市場まで出かける。

野菜・果物、そして、季節柄だろう、きのこ類がいくつも豊富に出ている。

いくつか購入する。他にみやげ用の小物類。水彩の風景画など。

日本各地の朝市にちょっと似た感じ。

この港風景は、11年前、そして15年前に訪問したカナダのヴィクトリアに似ている感じだ。

その後、緊急用に携帯を持たないといけないというので、中央駅近くのノキアの店（右写真）に行くが、10時開店ということで、後ほどに、ということにする。

※ 後に訪問。中は広い。さすが携帯の本場だ。ノキアは世界最大級のIT会社だ。



経済研究者である二人が別のところへ行くので、私は先に帰り、お留守番。洗濯物干しを終えて、今、日記などを書いている。

ここのコンピュータ事情はいい。

今使用しているのは、婿殿から借用している携帯パソコン

始動すると、「ネットワーク接続環境にあります」というメッセージが出る。

そこで、婿殿にセットしてもらおう。無線で20以上の接続環境が用意されている。ビックリだ。リナックスとこの機種に合う接続を選んでもらう。たちまちインターネット可能となる。

そこで私のブログにアクセスする。名古屋での生活指導学会参加からの連続の旅なので数日ぶりのブログ再会。

そして、記事投稿に挑む。ところが、パスワードを忘れていた。いつもオートマチックにやっているのに、記憶していないのだ。沖縄に連絡して、調べてもらうことにした。いよいよフィンランドからのブログ投稿ができそうだ。

たった一つのブロードバンド環境ができて大喜びの玉城とはおお違いだ。さすがIT王国フィンランドだ。

ところで、このリナックスパソコン。リナックスには、いろいろな思い出がある。

その1 アメラジアンスクール校長をしているとき、机上にあったのが、リナックスパソコン。ところが、使用方法が分かる人がいないので、宝の持ち腐れ状態が続いた。

その2 ある全国紙記者が、私のワークショップについて電話インタビューしたが、かれが私のワークショップを評して「ウィンドウズ型ではなくてリナックス型ですね」と話した。

無料で誰でも使え、独占的ではなく誰でも活用発展させるものだ。

その3 そして、そのリナックス誕生の地がフィンランドなのだ。



左は、ヘルシンキ中央駅を正面から写す。  
手前左側からトラムが走ってくる。

## 岩教会・博物館・携帯電話購入 9月7日夕方

午後、歩いて観光スポットなどを回る。

まず近くのカンピを通り、テンペリアウキオ教会へ（左下写真）

自然の岩を切り出して、半地下に作った教会

スピリチャルな雰囲気を作り出すのに絶好。しかし、観光客がたくさんで、雰囲気が感じにくい。

フィンランドは、この教会もそうだが、ルーテル派プロテスタントが多い。

次は、歩いてすぐのフィンランド国立博物館（右下写真）

石器時代・鉄器時代の展示からすぐにカソリック時代・ルーテル派時代のキリスト教展示に移る。そして、大公国時代へ。というように、歴史に『ブチ切れ感』を持たせる流れ。スウェーデンやロシア支配などの狭間で困難を強いられてきたフィンランドの特徴を反映しているのだろうか。





次に、歩いてすぐ、国会議事堂の前を通る。(右写真)

そして、午前中の開店前に行ったノキアの店にいき携帯電話を買う。そして、すぐ近くにあるキオスクでプリペイドカードを購入。

わずか10分の買い物、しかも100ユーロ(1万1000円ぐらい)で、国際電話/国内電話が使えるという。これまた日本では信じられない話だ。IT・携帯王国ならでは話だ。

セッティングは、簡単だとのことだが、説明書はフィンランド語/スウェーデン語なので、少々心配。心落ち着いてからやるつもり。

そして、スーパーで買い物をして帰る。

スーパーではハーブティーを探す。

英語表示がある商品はいいが、ハーブティーは、フィンランド語とスウェーデン語表示商品がほとんどだ。仕方がないので、絵でどのハーブが入っているか推理する。でも適切なものが見当たらないので、ミックスしたものをひとまず買ってみる。



## ヘルシンキ大学植物園

9月8日午前

ヘルシンキ大学植物園が、中央駅の向こう側にある。だが、行く途中で、道を間違え、15分でいけるところを25分かけてしまう。駅周辺の道が多少入り組んでいる。カンで行ったのが間違いの元だった。

植物園を取り囲むように、高さ10-20メートルの大木が並ぶ。樹齢は100-200年だろう。

そして、その間にグラウンドがいくつかあり、クラブハウスというか、道具入れの箱状のものがある。多分ヘルシンキ大学の運動部の練習場なのだろう。その一角に、大き





な紫陽花の花を見つける。アジサイだというのは、推理だが。

周りを半周ぐらいして入り口を見つける。入場料は不要。中にある温室は有料のようだ。温室には、この地の気候では冬を越せないもののようだ。バナナが見えた。そうした植物よりこの地のものに関心があるので、外だけをまわった。朝なので、訪れる人は少ない。高齢者の方が多い印象。

表示が、フィンランド語とスウェーデン語なので、名前はほとんどわからない。ハーブ園だけは、推理できるものがあつた。

右は、キキョウの仲間だと思うが、名称不明。



落葉樹が結構あつた。もうすぐ落葉の季節になるだろう。寂しくなるだろうと思う。トロントにいた時、夏は森の中に家が少し見えるが、冬になって、家がいっぱい見えるという対照的な光景だったが、その時を思い出した。意外と針葉樹は多くない。



草花園のなかで、赤く美しい花を咲かせているのは、絹さやだった。実もたくさんついていた。この時期に絹さやか、と意外に思った。



ハーブ園は、フェンネルやラベンダーなどの寒地のものが多いのは当然だろう。



リンゴの木には、可愛い実がいっぱいついている。小さすぎて食用にはできないだろう。

バラの花は少し残っていたが、実が結構ついているのにびっくりした。バラに実がつくなどとは知らなかった。







季節が終わったのか、花が少ない中で、ひときわ目立ったのは、シャクヤク、もしくはボタンだった。



植物園脇の並木道

帰る途中、建物のまえに子供たちがたくさん出てきて遊んでいる。小学校だろうと推理した。多分休み時間には外に出て遊ばなくてはならないキマリになっているのだろう。トロントと雰囲気似ている。



その後、中央駅前の国立アテネウム美術館に行く。近代絵画が中心の展示。

沖縄とは対照的な色づかい。暗い色調。見ていると、深刻なムードに引き寄せられる。そして、比較的シンプルな表現。そこに哲学的な雰囲気さえ感じる。また、フィンランドの風景を織り込んだものが多い。





## 歩く人・フィンランド語・多文化

余談1 道行く人々は足早だ。背筋をピンと伸ばして、ぐいぐい歩くといった感じ。男女共にだ。沖縄とは対照的だ。

### 余談2 フィンランド語の話

公式言語は、フィンランド語とスウェーデン語なので、この二つが併記されていることが多い。英語表記はそれほど多くない。購入したノキアの携帯電話の説明書もこの二つだ。だから、読むのは不可能だ。街角の表記でも、英語に出会うことは少ない。

でも会話は英語が通用する。私よりはるかに上手な英語だ。この三つの言語が使用できるというのが、ここでは普通なのだ。

スウェーデン語の方は、時々推理できる単語に出会うが、フィンランド語、完璧に無理だ。でもローマ字表記どおりに読めばいいというので、意味不明でも、読むことはできる。それで、日本語話者には親しみを感じさせる言葉だ。市場で絵を売っていた若者が、日本語は馴染みやすいと言っていたが、同じことだろう。

フィンランド語に似た言語は、隣のエストニア語だけだそうだ。

意味不明でも親しみを感じるので、ちょっとした楽しみをしてみる。ミコンカツという地名があった。初めは、「みそかつ？」と感じたが、冗談で「未婚活」といったら笑われてしまった。「カツ」というのは「一通り」という意味だ。私たちが滞在している通りは、エエリキンカツだ。

そういえば、ロシアも近い。今朝、セントペテロブルグからのバスを見た。久々にロシア語を聞いた。40年以上前に第二外国語でロシア語を学んだ私には懐かしい言語だが、まったく忘れてしまった。

### 余談3 多文化性

色々な地域から来た人々に出会う。色々な食事を出すレストランもあちこちにある。この近くでは、中国、トルコ、日本、ネパールなど。多文化主義を原理とするカナダほどではないが、日本よりずっと多文化的な感じだ。

## 若者の大騒ぎ・シベリウス公園

9月7日夕方

### シベリウス公園まで散歩

途中の地図上の緑地は墓地だった。木々に囲まれて雰囲気を感じる。個人墓地が中心で、二ー三人が一緒にならんでいる例も多い。(右写真)

そこを抜けると海岸。最初はそこがシベリウス公園かと思ったが、そこは、ただの海岸。





高校生と思われる若者がクラス単位か、一緒にサッカーとかゲームに興じていた。

・・・後で気づいたが、あちこちで、しかも私たちのアパートメント一階でも、若者の大騒ぎ。どうやら高校生ではなく、大学生の新入生歓迎行事のようだ。一階はまさに「飲み会」で、順々に飲ませていく掛け声がすごい。「いっき、いっき」「もういっぱい、もういっぱい」『ガンバレガンバレ』と聞こえるように聞こえた。



海岸に座り、湾をしばし眺める。

そこを抜けて、歩いていくと、レジャーボートがならんでいる。周りは高級マンションが並ぶ。その一つは最近できたばかりのデザインが売りになっていそうだ。

その先が実はシベリウス公園だった。大きな木がならんでいる。雰囲気のある森だ。

回り道をしたが、直線だと30分足らずの場所だ。







シベリウス公園のモニュメント



公園内の別のモニュメント

## ブログへのアクセス・外出・生活リズム

9月9日朝記

ていだブログへのアクセスで苦労している。

パスワードも正確に入力しているが、うまくいかない。こういうことに詳しい娘夫妻がいろいろ調べてくれる。結果として、リナックスパソコンとていだとの相性の問題らしい。そこで、いろいろと工夫してくれた。ということで、なんとか成功しそうだ。そのため、数日遅れで投稿をすることになる。

9月9日夕

毎朝、今日はどうするか、と相談。私にとっては、3〜5時間の外出が適度だ。当面は、『地球の歩き方』『ビクターズ・ガイド』（ヘルシンキ市観光局）が、情報元だ。

外出以外は、旅日記書き／読書などだ。だから、沖縄での日常生活リズムとの変わりはない。むしろ、農作業や卓球はないが。でも、かなりの量歩いている。室内でのストレッチは欠かさない。

外出は一人の時、娘や婿と一緒にの時と、いろいろだ。最初の数日間は、ヘルシンキ市内を中心にしていくつもりだ。そのうち、ヘルシンキ以外、さらに人々との出会いも出てきそうな気配だ。

今日は、いくつかの候補から、セウラサーリ野外博物館を選ぶ。

## セウラサーリ野外博物館 9月9日夕

滞在4日目。市街地ではなく、郊外の自然感のある場所に挑戦だ。徒歩圏を越えて、バスなどの交通機関使用だ。セウラサーリ野外博物館へは、ガイドブックによると、市バス24番にスウェーデン劇場前で乗るとある。バス停の時刻表は、フィンランド語とスウェーデン語だけだが、カンで読む。次のバスまで15分あるので、飲み物・サンドイッチを購入。

行き先地のレストランは、土日しか開かないとあるためだ。

バスのチケットは運転手から買う。チケットは、日本のチケットのイメージとはまったく違い、レシートのようなものだ。そういえば、他のヨーロッパでもそんな感じだった。

乗ると、小学生の団体で満員だ。しばらくいくと、我がアパートメントの近くを通る。「なーんだ」ということで、帰りは近くのバス停で降りた。そして、昨日いったシベリウス公園のそばを通っていく。バスに乗って20分ぐらいで到着。

セウラサーリ野外博物館は、小さな島で、橋でつながっている。入り口で入場券購入。順路があるわけではないので、森林浴散歩気分で行く。途中風車小屋を過ぎる。

一説によると、大統領もこの島を散歩するという。女性大統領なので、「あのおばあさん、大統領かもしれない」と勝手に推理する。

フィンランドは、人口500万なので、沖縄の5倍、愛知県より少ない。だから、国会議事堂は、県議会のイメージに近い。でも、しっかりした一国であり、ここに至る歴史の重みは大きい。

7月ころは緑に覆われていただろうが、いまや落葉直前の季節。すでに紅葉が始まっている木もある。だから、鬱蒼とした感じではない。

そして、島の野外博物館施設は、9月15日までのオープンだ。以降、5月15日までの長い休み期間に入る。9月の開場時間は9時～15時なのだ。







だから、小学生の社会見学・遠足がいまどきにセットされているのだろう。バスで乗り合わせた以外にいくつもの小学生団体がいた。来訪者は、ほかには、散歩の高齢者と、外国からの団体客だった。その一つのドイツを話す人々の団体が入場していた施設に、私たちも入る。

前ページ写真は風車小屋。

左写真の私たちが偶然入った施設は、園内の施設の維持管理をしつつ、木工のワークショップなどをする施設で、常時開放している

施設ではなかったらしい。何かがあって、ドイツグループが入っていたときに、休憩所と間違えた私たちが入ってしまったようだ。

その職員に声をかけられた。この若者にとっては話し好きだ、たくさんの話題に飛び火しながら、30分ぐらい会話したか。

日本、フィンランド、沖縄、木工/建築、日本の大工、フィンランドの大工養成、国柄……。日本に関心が深く、沖縄の米軍基地のこともご存知だった。

盛り上がり、かれの仕事部屋まで案内された。

右写真は、公園建築物維持管理部門の木造建築作業場にて写す。



ここでは、松が立派な建築材料だった。建物の基礎に使う重要なものだ。後で、まっすぐ伸びた太い松の木を見た。曲がりくねる日本の松を見慣れた私たちにとっては不思議な感覚を与える。

また、かれの話だと、日本の在来工法と、フィンランドの工法には共通したものがあるらしい。

そして、最後に近くの古民家を見ていくよう勧められた。最後に記念にと思って渡した名刺を見て、彼はメールを送るかもしれないと話した。

彼の出身地は北カレリアのコリで、いいところだそうだ。帰宅してガイドブックを見ると国立公園ですごくいいところのようだ。しかし、8月半ばでシーズンは終わりのようだ。

散歩を続けていくと、移築した古い建物が立ち並んでいた。やっここで野外博物館であり、入場料6ユーロであることに納得であった。

古い民家、教会など、すべて木造のしっかりした建物だ。なかには大型の船を収める建物もあった。その船は、教会船と呼ばれ、教会礼拝の送迎船ということだった。見たところ、30人の漕ぎ手の船が一番大きかったが、100人も乗ったとのこと。



古い民家のなかで大きいものには、夫、妻、娘、台所、農機具部屋、叔父、家畜、サウナなどの部屋がある建物で、広い中庭を囲む建物だった。そこでは、小学生相手に、職員が説明をしていた。

左写真は、民家の中で、学芸員とおぼしき人から説明を受ける小学生たち

散歩していると、かわいいリスにしばしば出会う。栗色で表情豊かな雰囲気を持つ。一匹が私の足に『登ってきた』 多分、おやつのおねだりだろう。結果的に三時間あまりの滞在になった。

ここは一つの島なのだが、島のあちこちに、主として18～19世紀の建物が移築保存されている。そのいくつかを何回かに分けて、紹介しよう。古びているが、木造建築がこのように残されている事に好感を持つ。

右写真は、保存されている民家。これは比較的新しい。



食糧庫



2～300年前の食糧庫







カルナ教会内部 古い木造教会。落ち着いた気持ちになる。

330年前のしっかりした建物で、いまでも使えそうな感じさえする。

カルナ教会外観



さすがサウナのフィンランド

民家のなかのサウナ室

結構広い。10人は余裕では入れる、といった感じ。

松の巨木 先に紹介した公園建物管理部門の工場では、これが建物の基礎個所に使われていた。

こんなに垂直に高く伸びる松を見た経験が稀なので、びっくり。

### 森の中

この森はよく整備されており、散歩、ジョギングに絶好だ



## 街・ゴミ・自動車・岩石・建物

9月10日夕記

このところ、よく歩いている。

8日のシベリウス公園，9日のセウラサーリ島，そして10日のスオメンリンナ島，いずれも歩くコースに出かけた。それに，その地にいきつくまでも，よく歩く。だから測ってはいないが，一万歩をはるかに越えているようだ。

自動車がよく通る道路も歩くが，排気ガスがひどい印象はない。長年，弱い呼吸器と付き合ってきた私には助かる。歩きながら，様々なウォッチングをする。看板。地名。店。マンションなどなど。英語にお目にかかることは少なく，理解がまったく困難なフィンランド語，スウェーデン語であるだけに，想像するのが楽しい。

街中の狭い道路は別にして，たいていの通りには街路樹が植えてある。今は緑があるが，落葉したら寂しいだ



ろうな、と思う。

街にゴミは少ない。例外は一回。街中の公園の芝生がゴミだらけ。大学生の新入生歓迎行事の余波だろうと推測する。

後日記・・・これは訂正しなくてはならない。

週日は、清掃がよく行われるが、土日になると、ゴミが増えることに気づいた。

自転車は多いが、多くの道路が自転車と歩行者を区分しているのが、ありがたい。

バイクはとても少ない。暴走族めいたものはなさそうだが、整備不良？のバイクが時々あって、大きな音を出す。

自動車は、いろんな国製のものに散らばっている。あえていうと、ドイツ、フランスが多いようだ。たまにボルボとかフォードを見かける。日本車は多くない。

軽自動車はなさに等しい。日本製の二人乗りのものをたまに見かけるが、軽自動車扱いでないようだ。軽自動車という区分があるのだろうか。

何度も信号待ちするような渋滞光景に出会ったことはない。電車・バス・トラムなどの公共交通機関が発達している感じだ。人口500万の日本の都道府県と比べると、はるかにいいように思う。

町のところどころに、重量感あふれる巨大な岩石が顔をのぞかせている。とても古い岩石のようで、それを氷河が丸くなららかに削ったようだ。そのためもあるのか、岩石を削って、道をまっすぐ通すというのではなく、起伏に応じて、道や街を作った感じだ。日本で岩石というと、ゴツゴツを連想するが、ここでは、柔らかさを感じる。

建物には100年、200年をへたものが多そうだ。たまに



現代的なものを見るが、まわりの歴史の長いものとマッチするように工夫しているようだ。日本のように新旧の建物の並存が雑然感を与えるのとは異なる。

上写真は、ヘルシンキ中心部にあるアパートメントの前の通り光景

左はバスのチケット。セウラサーリの往復に運転手から購入。

日本の感覚では、チケットというより、レシートだ



ノキアで買った携帯電話

フィンランド語表示なので、意味不明。カンで使うしかない。後に、娘が英語表示に変えてくれた。



## スオメリナ 9月10日夕記

午前中、スオメリナに行く。スウェーデン支配下の18世紀につくられ、19世紀には、ロシア、そしてフィンランド独立後の20世紀にはフィンランドの軍事基地があった島だ。

スオミが、フィンランド語の「フィンランド」で、リナは城という意味だそうだ。そんなに大きくはない連なった四つの島で構成されたまさに「海上要塞」である。

ユネスコの世界遺産でもある。かつての軍事に彩られた島は、今は歴史遺産、そしていこいの島であるようだ。軍事的なものは、海軍の学校があるくらいだそうだ。

それでも800人の方が生活しており、学校もあるようだ。9時発の船に乗ったが、島からの通勤客らしい方々と入れ替わっての乗船だった。

バルト海を広く見渡せる島で、軍事的要衝になりそうな気配を強く感じた。実際、この地で戦争があり、悲劇の島でもある。島内にあるスオメリナ博物館には、そうした戦争の歴史遺産が展示してあった。

島の南端には、いまでも大砲が歴史遺産として数台置かれている。私は、1972年まで渡嘉敷島、多野岳にあった米軍のナイキハーキュリー、つまり対中国のミサイル発射台を思い出した。少し凹みをつくってセットされ、近くには弾薬庫とおぼしき土の山が築かれていた。

博物館の映画だと、攻撃してくる船めがけてここから砲弾を発射したようだ。島のあちこちには、要塞の名にふさわしい構造物がある。

ところで、島のなかには、軍事博物館もあらず。ここでは平和博物館とはいわず、戦争とか軍事とかつける。カナダでもそうだった。日本では、平和の名が普通だ。この名のプラスマイナスも話題になるう。

左写真は、スオメリナ博物館。

右は、人間が近づいても、ほとんど動かない海鳥。







大砲近くにあるビーチ  
バルト海に面した美しい海

スオメリナは、要塞の島だった。今でも残されている。

要塞内部の通路





要塞の建物 銃眼らしきものが見える  
 右は、要塞の中から外を見る  
 この要塞は、バルト海に向かっていて、大砲がそれを象徴する。





## 天気・情報入手

9月10日夕～11日午前 記

10日、スオメリナにでかけた日は、快晴で心地よい。11日、雨だ。小雨ないしは霧雨といった感じ。気温は15℃前後。雨に濡れた、窓の外の石畳道が喜んでいる感じ。

11日午後追記・・・雨なので、傘が必要かと思うが、まわりの通行人を見ると、傘持参は、1～2%の人。霧雨で、降ったりやんだりなので、傘不要なのだろう。傘購入はやめた。

インターネットで、天気予報を調べる。10日までの晴れ続きとかわって、しばらくは曇り・雨の予報だ。日本の天気の移り変わりと比べると、ゆっくりしたテンポのようだ。

湿度の高い沖縄はもちろん、日本と比べても乾燥気味だ。しかし、トロントほどではない。トロントの時は、バスタブに水を張って、室内の湿気を確保するなどの工夫をした。そうしないと、乾燥で喉を痛めるのだ。しかし、ヘルシンキは、海に近いせいか、湿気があり、その必要はない。

でも日本に比べれば、乾燥ぎみで、雨の日以外は、洗濯ものが、室内で十分に乾く感じだ。

天気予報などのニュースの情報入手先は、インターネットに頼るしかなさそう。テレビでは、英語チャンネルもあるが、ニュースに遭遇したことはない。フィンランド語のニュースを見るが、画像イメージしかわからない。一週間一回発行の英字新聞を見つけたが、天気予報も一週間単位で、それほどあてにはできない。

ということで、インターネットが一番都合がいい。11年前カナダ在住期に比べるとはるかに事情はいい。それで、このところ、沖縄の新聞と、日本の全国紙を閲覧している。

ところで、スオメリナへの行き帰りの船に乗る前、往復の乗船券を買うが、どこでも切符をわたさないどころか、提示も求められない。乗り合わせた日本人客が不思議がる。「性善説による」との声も聞かれる。



ここで、ヘルシンキ滞在開始数日後にとった写真を何枚か紹介しよう。

右上 ヘルシンキの港近くの小島 こんなところにも、豪邸がある。別荘だろうと推理する。

左は大統領官邸。港の前にある。すぐ近くに、国家機関やヘルシンキ市機関が集まっている。

スオメリナからの帰りの船からヘルシンキ港を見る

バイキングラインなど、大型クルーズ船が3隻とまっている



## キアズマ国立現代美術館

9月11日記



霧雨が降ったりやんだり状態なので、近くのキアズマ国立現代美術館に行く。デザイン性豊かな建物だ。現代美術に対応している。

展示の現代美術は、しばしば見かける「奇をてらう」タイプや「遠未来」型のは少ない。日常生活感覚に近く、現代社会の盲点を突き、そのありようを訴える「まじめ」タイプが多い。

夫婦喧嘩シーンをビデオ映像化したもの、たくさんの人形を壁に飾ったもの、何千という蝶をデザイン化したもの、などもある。

そんななかでも、孤独の心象風景をえがくものがいくつもある。寂しさを訴えている。出どころのない孤立・寂しさが表現される。哲学的雰囲気さえただよ。重い。

対照的に、ジョークや皮肉で表現するものは少ない。

これがフィンランドの一つの顔なのであろうか。地味で真面目なのだ。

左上は、玄関前からの撮影

右はキアズマ国立現代美術館遠景



## マーケット広場

ここはあちこちに行く要所でもあるので、何度も行った。買い物もした。

写真は八百屋さんを写したものだ。他には魚屋、土産物店、屋外カフェなどがある。



## 物価・食事

9月10～12日記

物価の話。フィンランドは「高い」と聞いていた。しかし、私の印象だが、沖縄より高いが、日本の都市地区と同じくらいか。バスは2.5ユーロ。博物館・美術館などは5～8ユーロ。

日常的に接する食堂は、8～13ユーロぐらい。

衣類は安い。10～20ユーロでTシャツが買えそうだ。

消費税は2.3%だが、価格表示に含まれているので、意識しにくい。

あちこちにスーパーマーケットがあり、不便を感じさせない。ビールなども売っている。酒類は国営店で販売。棚のほとんどは、世界各地からのワインだ。

### 食事

魚が意外に少ない。スオメルンナ島のカフェで、鮭のおいしいのに出会った。ソースにはベリーもはいつているらしく、新鮮な感じがする。市場には数種類の魚が並んでいる。

酒でビール以外に飲んだのは、国営の酒店で見つけた地元産のブラックベリー・ワイン(写真)。これがかなりいい。濃厚で、味わい深い。トロント時代に経験したアイスワインに匹敵。それは、秋、枝についたままぶどうを凍らせたものを原料にするもので、普通のものの10倍以上の価格。その味のレベルだと感じる。

フィンランドみやげ候補には何があるか、と尋ねると、娘たちが「サルミアッキ。とてもまずいけど」という。では、一度試してみよう、というので、購入し試す。(右写真)





私には「いい」と思われる。特徴的な味だ。すると、娘たちも試してみて、悪くないという。多分好みの問題だろう。

## ヘルシンキ南部 計画なし散歩

9月11日午後。



アパートメントはヘルシンキ中心部の商業・住宅区にある。そこから繁華街方面には毎日出かけているが、反対方向へはまだだ。そこで、反対方向への散歩をする。昨晚寝すぎるほど寝て体力充実なので、散歩というより、



速足だ。1時間をめどにして、写真を撮りながら、無計画に出かける。こんな散歩をトロント時代にはよくやった。

まず西に向けてスタート。アパートの前の通りをまっすぐ行く。タイ料理店、キューバ料理店を発見。お店が並ぶこの通りも5分もすると、住宅街だ。つきあたって南に方向を変える。港に行き当たる。名前はわからないが、もう一つのヘルシンキ港で 貨物埠頭が多そう。(上写真)

港から見える大きな建物は、地図を見ると、ヒエタラハティ・アンティーク&アートホールと書いてある。(中写真)

さらに南に行くと、海岸線に出る。散歩の人たちが増える。犬を連れた人も多い。平日出会う歩行者は、とても早く歩くが、土曜日の今日は、ゆっくりの人も多い。海が見える場所のマンションは高級感が漂う。でも、一軒家はまったくない。

右は、南岸沿いの高級マンション。





海に突き当たって、海岸沿いに東に進む。海岸は、ここではよく出会う岩だ。海にはたくさんのレジャーボートやヨットが浮かぶ。

今日は、霧雨か曇りのそれほど好い天気とは思えないが、多すぎてぶつかりそうだ。時々警笛が聞こえる。

ヨットには何人も乗っている。

中写真は、レジャー用の港近くだ。

ここで、出発後45分になったので、アパートに

戻る北方向の道をとる。

私の予定なし散歩は、時間だけを決めておく。その半分になったら、帰り道につく。

このあたりのアパートは、値段が高そうだが、大半を占める昔ながらといった感じのアパートのなかに、現代的な建築が並ぶ。とはいっても、突飛な形ではない。

(下左写真)

このあたりでは、道路沿いには緑地が並行することが多い。しばらくすると、きれいな公園、そして教会に出会う。

アパートにもどって、たまたま見たト

ラムの駅説明には、「ミカエル アグリコラ教会（ルーテル教会 1935年）」と、書かれている。（下右写真）





この教会のある道路は、フレドリキンカツ通り(右写真)で、わがアパートメントまではまっすぐだ。歩いていくとだんだんお店が増えていく。トラムの説明書にはブティックが多いとある。

かくして、80分の散策は終わり。5キロほど歩いたろう。こんな散歩が好きだ。また試みよう。



## 近くの教会など

ヘルシンキの街のあちこちに教会がある。街なかの教会は、歴史のあるものが多く、町の風情にマッチしている。

何度もそばを通った、近くの教会を紹介しよう。

一つは、左写真のバツハ教会で、教会の前は公園。

右写真の教会の名前はわからない。ヘルシンキ南への散歩の時に見つけた。隣の公園では保育園生が遊んでいた。恵美子と保育園探しに出かけた時、その教会の近くについて、うまくいった。デザイン博物館近くでもある。





バッハ教会の通りの向いの小さな公園には、カレワラ像が置かれている。フィンランドの「国民的叙事詩」で、愛されている。私はまだ読んでいないので、いつか読もうと思っている。

## ヌークシオ国立公園

9月12日記

フィンランドは何といても森と湖

どこか行きたいと考えていたが、ヘルシンキからもっともアクセスがしやすいのがヌークシオ国立公園らしい。「地球の歩き方」にも、現地の案内本にも推奨されている。

ヘルシンキの案内所でパンフレットをいただくが、英語版がなくて、フィンランド語版のみ。地図を見て、推理するだけ。婿殿が、インターネットで時刻表などを調べる。



朝8時に出発。現地の人々が、公園内にはお店がないので、食べ物飲み物を持参するように、アドバイス。駅で購入。日曜朝なので、駅員から切符を購入できず、フィンランド語の案内しかない自動販売機で購入するしかない。婿殿の奮闘により、無事成功。一人4ユーロで安価に感じる。

写真は、ヘルシンキ中央駅で乗車した電車（各駅停車）

行き先は、隣の市であるエスポー。ローカル列車だが、1時間に2、3本ある。乗ったのは、各駅停車で、13個目の駅まで行く。日曜の朝のためか、乗客は少ない。

広軌鉄道で揺れが少なく、止まる時のブレーキの揺れも感じない。揺れをあえていうと、横揺れよりも縦揺れをほんの少し感じるくらいだ。30分の乗車だった。

次の苦労は、バス乗車。駅を降りてすぐに接続しているという話だったが、簡単ではない。止まっているバスの運転手に聞くと、路線が違うとのこと。粘って、路線番号・乗車場所・次のバスの時間を聞き出す。その場所に行くと、その路線番号が見つからない。そこで親切な女性が、そのバスは駅の反対側だと教えてくれる。はきはきと英語で教えてくれたので、きっと学校教師だろうと推測する。

反対側に止まっているバスは、正解の路線番号だったが、乗り場は別のところで、そこに行くように指示され



る。

結局、そのバスが来て乗車。そして、バスは駅の反対側を經由して行く。乗客は、私たちの他は、二人。一人はかなりの装備をした中高年女性。もう一人は、スーツ姿のアジア系の方。全員終点まで行く。料金は2ユーロ50セント。30分乗車だから、割安感がある。丘陵地帯をぬって走る。かなりのスピードだ。

途中のアナウンスは一切ない。わたしたちはどこで降りるかわからないので、とにかく終点まで行く。

終点では、案内図があり、一応の予定をたてる。だが、最初の入り口がわからない。そこで発車待ちの、例のバス運転手に尋ねる。結局、「わからない」ことがわかる。

バス運転手は、大変素朴な雰囲気だ。英語の対応はしてくれる。サービス精神といえば、問題になろうが、人柄はとて面白い感じがする。

行きたいところは、公園の一番の中心部。どの道を行けばいいのかわからない。他に人は少ない。しばし探していたら、マウンテンバイクで巡る親子、といっても推理だが、60歳前後と30代の男性親子に尋ねると、とても丁寧に教えてくださる。救世主のようだ。



その道に入っていくと、日本の遊歩道のように、鮮明過ぎる案内板はないにしても、所々に、あと何キロという、木製の掲示がある。それに、道のそばの木々に、青や黄などの小さな板がうちつけてあり、それが案内してくれていることに気づく。一度、道を間違えたときも、それを頼りに修正できた。

ヘルシンキの街中でよく見かける岩が、ここでもあちこちにある。このあたりは、すべてこの岩盤の上になっているのだな、と推測する。もしかすると広大なのかもしれない。

氷河期以降、何千、何万年もかけて、そんな岩の隙間に根を下ろして、木々は大きく成長しているのだらうと推測する。

固い岩盤は、そのまま残り、そのうえに、トレイル＝遊歩道をつくったところも多い。すべりやすく、歩きにくい、風情がある。  
(右写真)







そんな岩には苔がびっしりとついていることがある。まさに「苔むす」感じだ。その苔の緑色の美しさは素晴らしい。



所々にキノコが顔を出している。どれが食用で毒なのかは、皆目わからない。途中でキノコをとっている高齢女性を見かけた。国立公園だけど、キノコは取ってもいいそうだ。キノコ取りのシーズンなのだ。ヘルシンキの港市場にも、キノコをたくさん売っていた。

公園中心部に近づくと、時々すれ違う人がいる。家族連れが多い。トレイルがきちんとしており、たくさんの人が通って踏み固められている感じがするので、シーズンの時は歩く人が多く、にぎわうのだろう。

右写真のトレイルの向こうに湖が見える。

こんな風に、所々に湖と言うか池というか、顔を出す。地形的に湖・池・沼が多そうだ。





苔の緑が鮮やか



湿原もある。たまに、木道もある。その周辺では地面に苔が多い。

スタートから1時間余り歩くと、公園中心部に着く。人がたくさんになる。設置されているバーベキューポイントで食事をするグループもある。

公園中心は、大きな池、というより湖だ。蓮の葉がたくさん浮かんでいる。花のシーズンは終わったようだ。



紅葉のシーズンが近づいている感じがしたが、紅葉する木は多くはなさそうだ。

湖のかたわらで、昼食をとる。

そして、バス停へと道をとる。このあたりは人が多い。団体やグループも見かける。駐車場には、車がいっぱいだ。大多数の人は車でくるようだ。バスは子供グループや車をもたない人が活用するようだ。駐車場には、大型バスもとまっていたので、団体客・観光客もいそうだ。

この公園は、何かの日本映画でも紹介されたらしく、日本人観光客も関心が高いそうだが、日本人とは出会わなかった。







帰り道、かわいい家を見つけた。

このあたりには一戸建てが多そうだ。とはいっても、かたまって建っているわけではなく、離ればなれにありそうだ。道路にはところどころ郵便ポストがいくつかかたまって置かれている。多分、ここまで車でとりにくるのではないかと推理する。

バス停につく。中写真は、バス停から写した、ヌークシオ国立公園中心への入り口の案内板だ。白樺の木が囲んでいる。

帰りの電車は、日曜日でも午後になったせいか、けっこう混んでいた。ところで、この電車は、降りるとき、乗るとき、ボタンを押す。すると開く。閉じるのは、自動だ。日本では寒い地方の冬場に見かけるスタイルだ。

私の日本のドコモ携帯は、ここでは電話としてはまったく役立たずだが、歩数計としては使える。そこで、今回は持参して、歩数を測った。出発から帰宅までで、16000歩。ヘルシンキ駅への行き帰りなどを差し引くと、公園では、13000歩歩いたことになる。平坦な道はわずかだったので、結構歩いたと思う。

帰宅して昼寝した。

余談 森林と田舎光景だが、農地が見当たらない。馬を飼育している場と牧草は見た。どこに農地はあるのだろう。ヘルシンキ空港への着陸直前に畑がみえたが。



## 屋内市場・ウスペンスキイ寺院

9月13日午後記

食料品などの買い物に出かける。いつものところではなく、港の屋内市場にでかける。歴史のある市場のようだ。細長い建物のなかに、二つの「通り」があり、通りをはさんで店が立ち並ぶ(左写真)。魚・肉・チーズなどの食料品が中心だ。なかなか良さそうだ。買い物は、他の場所からの帰りにする。

そこを抜けて、屋外市場に行き、野菜と帽子を買う。帽子は娘へのプレゼント。フィンランドマーク



入りのかわいく、デザイン性にすぐれたもの。こんな店は、おばあさんがやっていることが多いが、ここはおじいさん。80代かな、と推察する。口下手だが、実直さを感じる。

この界限にくると、観光客が多い。クルーズ船かららしい客は団体で行動するようだ。ヨーロッパ人や、中国人が多そうだ。日本人はそれほど見かけないが、一人か、2-3人の個人旅行が多そうだ。有名な日本人団体旅行には、まだ出会っていない。



さらにそこを抜けて、月曜日なので開館はしていないが、建物のまわりには行けそうな、ウスペンスキイ寺院に行く。(右上は遠景。中の2枚は敷地内から撮影)  
ロシア正教の立派な寺院で、19世紀後半の建造のようだ。重みを感じる。

高台にあるウスペンスキイ寺院からは、見晴らしがいい。すぐ隣の大統領官邸、そして屋外市場もよく見える。その先がヘルシンキ中心部だ。



再び屋内市場に戻る。まずコーヒータイム。ここのコーヒーはおいしかった。香りがいい。値段も安い。さすが市場。

ここで、来客もてなし料理用の魚などを買う。結構、種類はある。海藻の袋詰めがあり、日本語の説明がついていたが、値段が大変高かった。

驚いたのは、この市場の一角に、寿司屋がある。午前中なので、まだ開いていなかったが。

※ 滞在日数が増えるにつれて、あちこちに日本食レストランが多いのに気付いていく。日本食ブームは、この地にも広がっているようだ。

右写真は、魚店。



この後、帰り道に、ヘルシンキ随一の目抜き通り、ポホヨイエスプラナーディ通りを歩く。ウィンドウショッピング気分だったが、つられて4軒ほど中に入る。

イッタラの店にまず入る。帰ってから、ガイドブックをみると、フィンランド随一のブランドとのことだ。まず蠟燭たてが目に入る。見れば見るほど、いろいろなものに惹かれる。鳥デザインの置物などもすごい。値段も高いというわけではない。他の店も魅力的なものが多い。

いずれもデザイン性を売り物にしている。かといって、使いにくいものではなく、機能性にもすぐれていそうだ。デザインはシンプルさがいい。



そのうちの一軒、カンクリン・トゥパで、トナカイデザインのTシャツ1枚を買う。

恵美子が来たら、たまらなく喜ぶだろうな、とその光景を推理しながら、スーパーマーケットに向かう。

このあたりの道はだいぶ覚えたが、地下街や商店街・テナント街に入ると、わからなくなる。私は、空が見えないと、方角感覚がつかめない。私の地理感覚に依存してきて、地図がわからないと叫ぶ娘は、「視覚で空間を把握」するようで、こういうところは強い。



## カイヴォピスト公園

9月14日午後記

14日、午前9時スタート。11日の散歩は、アパートメントから南西方向の往復だったが、今日は南東方向へ向かう。

街で気づいたこといくつか。

1) 自動車は、歩行者に親切だ。これまでクラクションは聞かなかったが、今日始めて、信号無視の歩行者にクラクションを鳴らすタクシーに出会った。



2) 警官に出会うことは大変少ない。制服が地味なこともある。今日、パトカーと警官を見た。地図を見ると、ヘルシンキ警察がすぐ近くにあった。

3) 公的機関の建物表示は地味だ。博物館などもそうで、探しにくいほどだ。

4) 日本製の軽自動車スズキアルトを見た。ナンバープレートも他の車と同じで、外観は軽自動車の感じがしない。

アパートメントから、30分たらずで、海岸に沿うカイヴォピスト公園に着く。ここも巨大な岩の塊の上の公園だ。上写真は、巨大な岩の原っぱ。中写真は、巨大な岩壁が続いている場所。

ここからは、すでに出かけたスオメンリンナ島がすぐ近くに見える。





公園の紅葉が進んでおり，落ち葉が多かったが，紅葉する木は2種類しか見つけられなかった。

カイヴォピスト公園から出ると，美しい通りにでるが，「撮影禁止」の表示が見える。美術館でも撮影できる場があるほどなので，この表示は珍しい。なんだろうと，見ると，どこかの国の大使館だ。でも，この表示があるのは，一国だけだった。

緑に囲まれた美しい通りだ。

日本大使館は，ここにはなく，後で見つけたが，繁華街近くのビルの何階かだった。



左写真の建物は，最初何だかわからなかった。小さい赤十字マークを見つけたので，病院だとわかり，フィンランド語でも病院のような単語が書かれていた。地味だ。



この後、当初の訪問予定だった建築博物館を見つけたが、鍵がかかっていた。10時開館なのに、どうしたんだろう。隣のデザイン博物館は、11時開館なので、あきらめて中心街方面を歩いた。

そして、昨日立ち寄った屋内市場で、昼食を買う。サラダが5ユーロで、たっぷりトツナとエビが入っている。



## 元老院広場・大聖堂・ヘルシンキ大学

さらに、散歩の続きだ。

その後、アパートの方向へ、気楽な散歩。いつもと違う道をとったら、元老院広場（左写真）に出る。ガイドブックの最初にてでくるが、初訪問だ。

元老院広場には、2メートルの高さの熊の像が百以上並ぶ。熊には世界各地の人が絵をつけている。

多文化共生へのメッセージのようだ。





元老院広場の前にヘルシンキ大聖堂がある。ヘルシンキ随一のルーテル派教会だ。大きい。なかも広い。神聖な雰囲気に満ちている。



元老院広場の西側にヘルシンキ大学がある。外側に表示は見つけれない。(上の2枚の写真) 中に入ってみると、小さな表示がでている。大学としての権威誇示をしないのだろう。

若者の通行が、大学の雰囲気をもたらす。

14日午後、恵美子が日本から到着し合流する。

夕方、二人で散策。私は二度目なので、彼女のペースに合わせて、ゆったりと。

テンペリアウキオ教会、国会議事堂前。駅前の書店、フォルム百貨店内のムーミンショップ、通路脇の絵本店などを回る。



## 観光船＝クルーズ船

9月15日午後記

ヘルシンキ滞在中も半分を過ぎた。発見／味わいも第二ラウンドだ。

今日の午前は、恵美子と二人でまわる。大通りに行くが、店などはまだ開いていない。博物館なども午前10時、11時スタートが多い。そこで港前の屋外市場に行くが、断続的な小雨模様で、ここも開店テナントは少ない。



元老院広場に行く。たくさんの熊たちを見て回る。すると、政府庁舎前で軍隊が隊列行進。多分新兵訓練だとの印象。フィンランドは軍隊を持つ国なのだ。



その後、両替店で両替。円高だが、1ユーロ117円で両替。両替店は高めだと聞いていたが、そのようだ。そして、一昨日も入ったガラス、陶器、木工製品の店をいくつか見て回る。

その後、予定の観光船＝クルーズ船に乗る。観光シーズンも終わり近づいているためか、100～200人乗りの船に、10人ほどが乗船。こうしたコースを運行している会社を3社見つけたが、なかにはランチ付きプランもある。私たちはシン

プルなプランにする。1時間30分コースで19ユーロだ。

中にはちょっとしたカフェがあるので、そこでコーヒーとお菓子を買ってすわる。

写真は、クルーズ船から見るヘルシンキ市街地南部





クルーズは、港から南に向かい、先日出かけたスオメリナ島を見ながら、島々の間を抜けて行く。

島々は、休暇地の雰囲気、高級セカンドハウスといった感じ。小さい建物はサウナらしい。

こうした家は、金持ちだけでなく、多くの人が持っている聞く。

フィンランドでは、親の世代が家を建てれば、長持ちする家なので、子どもは家をつくる必要はなく、余裕があれば、こうしたセカンドハウスを手に入れるという。自宅をつくるにしても、何年もかけて、自分自身で建てる人が結構いるとのことだ。



家は、100年とか200年という単位で使用するのだろう。30～50年で耐用年数がかかる日本の家とは大違いだ。



ヘルシンキの近くは、島がたくさん。ちょっとした島にも、きれいな家がある。そして家の近くには船着き場があることが多い。



船のなかでの観光説明は、フィンランド語、スウェーデン語、英語、ドイツ語、ロシア語の順に、スピーディに行われる。数少ない乗客もさまざまのところからきている感じた。

陸に近い島は、橋をつたってヘルシンキ市街からわずかな時間でこられるという。

小舟で魚つりを楽しむ人も見る。海岸や船で見かける人は、平日のためか、高齢者が多い感じた。



なかには、高級マンションもあり、高所得層の身近な「リゾート地」と言った感じた。水上飛行機も2機見かけた。

左写真は、キャナルを抜けるところ。こうした船の航行のために作られたようだ。

高級マンション





休暇地の絶好の雰囲気



水上飛行機



説明の詳細は聞き取れなかったが、歴史的建物だそう

## フィンランド料理

9月15日午後

記

船観光を終えて、レストランに入る。フィンランド料理を食べようということになる。

メニューから、野菜ボルシチと魚料理を選ぶ。ボルシチは、ロシア料理のものとは異なって、あっさりした印象。でもボルシチ風の味だ。







写真は、入ったレストラン。

普通のレストランに入ると、東京並みの価格だ。この旅で、こういうレストランに入ったのは、3回だけだった。これがホテル滞在になると、毎日入ることになるので、支出が大変だ。

※ 沖縄にもどってから、しばしば「食事はどうだった？」と聞かれる。ほとんどが自前で作った、と答えるが、それだけでは、答えにならないので、「まあまあ」と答える。「目立つほどのものはない」とか「イギリス料理並み」と書いてあ

る本もあるが、「それなりの食事」である。フランス料理のように、料理に「誇り」をむき出しにするようなことはないが、だからといってまずいわけではない。グルメでもないわたしには、それほど関心があることではない。

寒いところだし、太陽に恵まれているわけではないので、国内の食材の種類には限りがあると思う。魚も、ノルウェーのように恵まれているわけではない。スーパーで売っている魚は数種類。野菜は10種類以下だ。季節がら、キノコが美味しかったが、スーパーにはなく、市場で売っていた。

## デザイン博物館

9月15日夜記

9月15日夕方、デザイン博物館へ行く。デザイン立国という言葉があるくらい、デザインが得意技のフィンランドだ。さすがだ。インテリア、家具、ガラス製品を中心に、オリジナルでフィンランドらしさを感じるものがあふれている。日本では、デザインというより、芸術に分類されるものも多い。

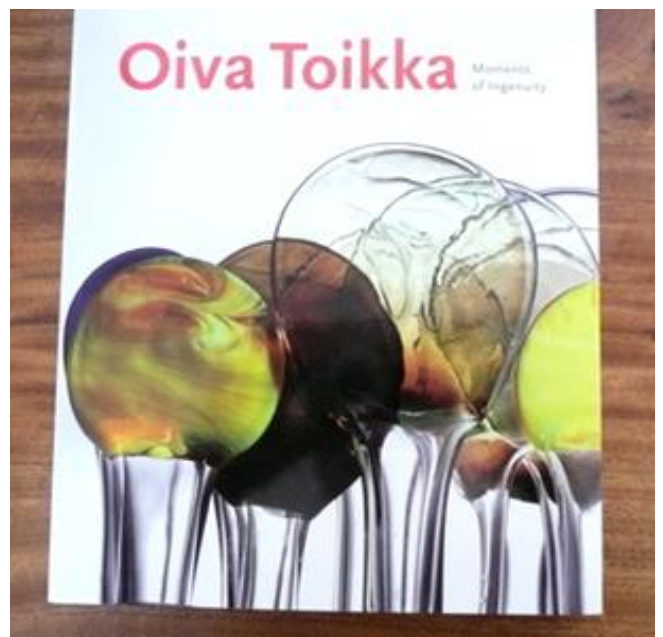
いろいろと刺激的なものが多いが、等身大のガラス像（めいたもの）を100ぐらい立てて、人間集団を表現したものが、私にはもっとも印象的だった。（次ページ写真）

生活芸術を追求した1900年前後のイギリスの運動を思い出したが、デザイン表現がまったく異なる。

説明を読むと、19世紀末に、スウェーデン、ロシアなどとの関係も意識しつつ、フィンランド独自のものを創造する動きがあったようだ。その際、カレワラ精神のようなものが役割を果たしたとも書かれている。

ここは写真撮影禁止なので、高価なガイド本を購入してきた。

写真集は、フィンランドのガラス芸術の中心的な人ら





しいOiva Toikkaさんの作品集だ。  
前ページ写真は、その表紙。

左は、等身大のガラス像で、この写真  
集に収められているもの。

タイトルは、「ガラスの森」。私は人間  
に見立てたが。森が人間のように生きて  
いるんだな、と思う。

沖縄のガラス芸術も最近優れた作品が  
次々と登場しているが、フィンランドは、  
さらに歴史的蓄積がすごい、と感じた。

帰りはあいにく雨だった。ここの天気  
予報は当たるのか当たらないのか、よく

わからないが、今日はあたって、雨が降ったり止んだりの天気だった。  
そこで、そうそうに帰宅した。

※ 私が滞在した前半は天気続きだったが、後半は雨が多かった。といっても、短時間で少ない雨だ。傘を買  
おうかどうか迷ったが、結局買わなかった。傘なしでもやっていけなくはない雨量だ。  
この時期は、『雨季』になるのだそうだ。

## セウラサーリ再訪

9月16日午後記

16日午前は、恵美子とともに、セウラサー  
リ島を再訪する。島の野外博物館は15日で終  
了なので、訪問者はぐっと少ない。高齢者を中  
心とする散歩、ジョギングをする人がほとん  
ど。団体は、小学生20人の一組だけ。静かだ。  
前回の訪問から一週間だが、紅葉が進み始めた。

公園の案内図に「大統領のジョギングコ  
ースと書かれた島を海岸沿いにぐるっと回るコ  
ースをとる。大統領ジョギングコース=島一  
周を歩く







ここ数日、雨が多かったせいか、きのこがたくさん出ている。



これは、きのこというべきかどうかわからない。「さるのこしかけ」に似ている。

天気は曇ったり、晴れたり、気温は12℃ぐらい。

ところが、である。一人の中年？女性が、水着で海岸沿いに泳ぐのに出会う。びっくり。

しばらく歩いて出会った public bathe と書かれた場では、男性二人も泳ぐ。







海岸近くだが、いくつかの池に出会う。そこには鴨たちが暮らす。

別の池の上に、藻めいたものが美しい図形を描いている。



水が静かに流れており、それが図形を作り出しているようだ。





途中で、つい最近の8月にできたばかりのカレワラ物語にもとづく小さな建物に出会う。アメリカ人のデザインと書かれている。

シャーマンたちの世界では、時間は直線で流れるのではなく、サイクルを描いて回る、ということ表現していると説明されていた。



その内部

その近くで、恵美子は大木の鼓動を聞いていた。







島は湾になった海に囲まれている。岩の小島が、このあたりらしい雰囲気をかもしだす。

リスにしばしば出会う。秋なので食料収集に熱心だ。大きな実をくわえているリスにも出会った。

餌を与える訪問者がいるらしく、われわれにもおねだりにくる。

11年前に滞在したカナダのトロントでも、街中のあちこちにいたが、ヘルシンキの街中では見かけなかった。そして、トロントのものより、ずっと小さい。かわいいという言い方でいうと、ここのがずっと可愛い。そして、人間の体にも触ってくる。トロントではそういう経験はしなかった。



鳥も多い。鳥にも餌を与える人がいるらしく、ベンチに座るとすぐに寄ってくる。足にのっかかってくるものさえいる。







雀に似た小鳥に餌をやっている親子ずれに出会う。彼らが餌をやっているところを写す

橋のもとで我々も休憩し、おやつを食べる。すぐに、かもめとカラスが集まってくる。小さなきれはしをあげると、争奪戦だ。カラスが強い。



かもめとカラスは一緒に群れを作っている。なにか不思議。このカラスはまだら模様だ。

鳥を2時間余りかけての一周だった。

セウラサーリ島を出て、シベリウス公園方向へ向かう。前回はバスに乗ったが、海岸線も美しいので、歩いてみた。

途中、立派な建物と庭園があった。レストランかと思ったが、そうではなく大変な高級住宅だった。日本なら、首相別荘という感じである。

シベリウス公園についたが、疲れてバスに乗った。3時間になる長時間散歩だった。





## クラフトショップなど

9月16日夕記

先日買ってきたトイペが面白い。日本では普通、数枚折り畳んで使用するが、これは、15センチぐらいの1枚でOKなのだ。分厚いこともある。紙の使用量が減らせそうだ。



16日夕、恵美子と夕方の街に出る。はじめにフィンランド・デザイン・フォーラムに行く。デザイン博物館とならんで、フィンランドのデザインに出会う好都合の場だと、ガイドブックには書かれている。しかも、ここは購入できる。博物館ほどではないが、さまざまなデザインと出会えた。紙工作風のものをいくつか買う。

ここの案内リーフレットもデザイン性溢れる。



そこから出て、目抜き通りへ。さらに、もう一つの目抜き通りに出るが、両側ともデザイン、クラフトのショップがならんでいる。南側には、はじめて入る。実は先日も入ろうとしたが、10時の開店時間前だったのだ。ここでは、10～18時開店の店が多い。土日はさらに短い。博物館・美術館などの公的施設もそうだ。勤務する人の労働時間をきちんと守るのはいいことだろう。

その店のひとつで、美しいデザインのフェルト作品を購入した。店の人とおしゃべりをする。10月にデザイナーたちとともに日本に来るとのこと。

許可を得て、お店の写真を撮った。きれいなディスプレイは、さすがデザインの国だ。

プレゼントのように包装してくれた。過剰包装ではないが、独特のやり方だ。リボンを蝶々結びにしていたので、「日本では『蝶々結び』というが、フィンランドでは、





どういう呼び方をするか」と尋ねたが、とくに名前はないという。

お店の店員は、最初の微笑みはとてもいいが、後の対応は実に地味だ。しかし、話しかけると楽しそうに語ってくれることが多い。

## 学生たちのコスプレ

9月16日夕記

2, 3日前から、目抜き通りで、大学生らしきグループが、おもしろい衣装をつけて、わいわいやっている。酒も飲んでいる。タバコを吸うものもいる。たしかここでは飲酒は18才からだと読んだことがある。

あまりにも楽しく盛り上がっているので、あるグループに近づいて、聞いてみた。

すると、予想どおり、ヘルシンキ大学の新生生のグループが、学部・学科ごとに楽しんでいる。写真をとって



もいいか、と聞くと楽しそうにOKだった。

左の写真は、文系学部のような。白い服のグループは何かと、ついでに聞いたら医学部だという。たしかに聴診器をかけている学生もいた。

次にであった学生たちは、もうすでに「出来上がって」おり、おおノリだ。教員養成学部で、小学校教員になりたい学生たちであった。「バイキング」か、と聞いたら、「パイレーツ」だ、と返ってきた。

その後、屋内市場に行く。コーヒー・ブレイクにする。デザートに珍しいものがある。パン生地の上に、白身魚がのっている。食べてみると、ヒラメの味。ヘルシンキで始めて生魚を食べた。



## 物価・生活

9月17日午後記

1) 信号の仕組みが複雑に感じる。交通量の多い市街地ではとくにそうだ。たとえば、交差点で車道に右左折用路線がある場合、歩行者は3つの信号を越えなくてはならないことがある。その際、3つが同時に変わるわけではない。手前が赤で、真ん中が青、向こう側は、すでに青になっていることがある。最初のころ、真ん中の信号に目がいってしまい、間違えそうになった。

この信号に慣れた人には、青になる前に渡り始める人がいる。しかし、わたしには、どういう順序で青になるのかわかりにくい。バスにのっていると、左折信号の出方が日本と違い、複雑に感じる。

でも、交通事故めいたものを見たわけではない。自動車が歩行者を譲る精神がかなり徹底している。まだ歩道にいるのに、自動車がとまってくれることもよくある。

2) 最初は物価がそれほど高くないと感じたが、食料など日常生活用品の購入が中心だったからだ。レストランとか、土産物店などにいくと、高さを感じる。日本より2-3割高めかなと思う。

消費税の高さも一因かな、と思う。

だが、人々の消費生活における金銭依存度はどうだろうか。日本のように、どこにいてもといていいほど、コンビニがある状態とは異なるようだ。ヘルシンキのような大都市でも、少し歩いて街外れにいくと、お店はないにひとしい。そして店の多くは6時ころにしまる。

私の推測だが、すぐ買い物に出るような生活をしなければ、なんとかなりそうな感じがする。その点では、私たちの沖縄田舎生活に似ているのかな、と勝手に想像する。沖縄田舎生活では、住宅費用と子供の教育費用が大きな問題となるが、ここでは、教育費は、日本と比べれば限りなくゼロに近そうだ。ヘルシンキ大学でも、外国人を含めて、授業料無料なのだ。

住宅は、ヘルシンキ中心部のこの近辺では、一戸建てではなく、すべてアパートで、築100年以上がざらだ。だから住宅経費も少なめになりそうだ。

3) 日常生活用品にもデザイン性があふれる。

写真は、羊毛製なのか、毛皮製なのかよく分からないが、スリッパだ。なかなかかっこいいし、暖かい。

照明、食器など含め、デザイン製豊かなものがあふれている感じだ。

4) 滞在10日になるが、日に日に、日照時間が短くなっている。来たときは6時過ぎに明るくなったが、今では7時前だ。気温も16℃ぐらいだったが、今日は12℃ぐらいだ。





## 美術作品・工芸品 9月17日午後記

今日午前中は、保育所訪問が最大のニュースだ。恵美子は、保育所訪問をぜひとも実現したがっていた。インターネットで、コンタクト先をいろいろと調べて、近くのファミリーサポートセンターを探し出す。

英語での情報量は少なく、直接、デイケアセンター(保育所と同じこと)を探し出すことはできなかったが、そこを手がかりにしようというわけだ。通り名と番地を手がかりに探し当てたが、建物工事中で移転先不明。電話もつながらず。

そこで恵美子式がはじまった。赤ちゃんを散歩に連れだしている親に、話しかけて情報を得る。大変親切なお母さんたちに出会い、ある保育所を訪問。そして見学・歓談をした。ここでの話は恵美子の領分なので、ここでは割愛する。

帰り道、印象的な作品を飾った店に入る。メルヘンチックな絵の作品が並ぶ。写真は、そこで購入した絵。展示している一連の作品の登場者はきつねと熊。店員に聞くと両者はフレンドリーな関係とのこと。

※ この作品の作者の作品と、後日美術館で出会う。全く異なる世界での表現であったことが判明。



少し休んだ後、再び外出。前日訪問した店を再び訪問。昨日応対してくれた方はお休み。聞いてみると、作家達が交代で店を見ているとのこと。

今日の担当は、ガラス工芸作家。スオメリナ島にある工房で、作成しているという。彼女が作ったガラスデザインの文鎮が気に入って、購入。ついでに記念撮影する。

写真は、文鎮の作者

この店の名はオクラ。野菜のオクラと偶然同じ。店の人もそのことを知っていた。



この後、屋外市場にいき、サーメ（ラップ）の人たちによる、となかいの角製のキーホルダーを購入。

そして、自ら写した写真を販売している店で、ふくろう写真を買う。

## エストニア首都タリン訪問

9月19日午前記

18日は、丸一日、隣国エストニアの首都タリンに行く。同じEU加盟国なので、大変簡単にいける。







写真は上甲板

まずバスで港まで行く。バスは満員状態。土曜日朝で、他のバスはがらがらなのに、このバスは満員。港に行っても、大変な混雑状況。

搭乗チェックインの時に、パスポート提示が求められたが、あとはすいすい。

それがかえって失敗しかけを招いた。すいすいと思ったら、違う船に乗る。タッチセーフで気づいて、乗り換える。どちらの船もタリンに行くが、双方とも満員。

私たちがのったのは、タリンク社の「スーパースター」という、大型のクルーズ船だ。

船上では、盛り上がる数人グループが目立つ。近くに缶ジン10本を飲んで、「出来上がっている」女性グループ。どうやら週末旅行のようだ。

それに大きなバッグをもつ人が多い。エストニアは物価が安いとガイドブックに書いてあった。とくに酒類がそうだ。「買出し」ではないかと予測する。ユーロ加盟国の人は、おそらくパスポートもなしで、気楽に行けるところなのだろう。

2時間でタリンに到着。

写真は、船上から見るタリン



タリンの街を見ての第一感。歴史性。オールドタウンと呼ばれるところが、観光地になっている。12〜13世紀ごろから街づくりが始まったようだ。それは城塞都市だ。

購入した英語版のガイドブックによると、デンマークが建設を始めたようだ。

左は、オールドタウンを港のある北側から見る

エストニアは、ソ連崩壊の流れのなかで、独立する。その記念碑（右写真）が、城入り口近くにある。



オールドタウンの北入り口の門にくっついた建物は、「ふとっちょマルガレータ」（中左写真）という愛称の旧監獄で、いまでは海事博物館になっている。展示物を見ると、バルト海の要所としてのタリンの歴史がおおまかにわかる。

写真は、北側の門からオールドタウンを見る



オールドタウンの中に入ると、中世の雰囲気想像させる。石畳道と古い建物ばかりだ。

写真は、スウェーデン大使館とブラックヘッド兄弟の古い建物

タリンはハンザ同盟の重要な場所だ。世界史の教科書で、50年前に習ったことは覚えているが、その中身はよく記憶していない。ギルドの建物もある。

200年ぐらいの歴史しかないヘルシンキとはお違いの雰囲気だ。とはいっても、城塞都市の外は、新しい感じだ。





オールドタウンを歩きながら、あちこちにある土産物店に入ったりする。

ここは、EU加盟国ではあるが、通貨はEEKという独自のものを使用している。そこで、一万円を下船入国した場所で両替した。もっと両替することをしきりにすすめられたが、数時間の滞在なので、それだけにした。使い始めると、貨幣価値が混乱してくる。我々が入るようなところは、ユーロも通用するので、使い分けに困った。



タウンホールと広場

昼時になって、昼食場所を探す。結果的にエストニア家庭料理店を選ぶ。(下左写真)

写真は出てきた料理だ。私たちにも親しみやすいものだった。この店は結構大きい。家族でやっているとの話だ。一人でウェイトレス役を務める娘さんの行動力あふれる動きは感心させられた。



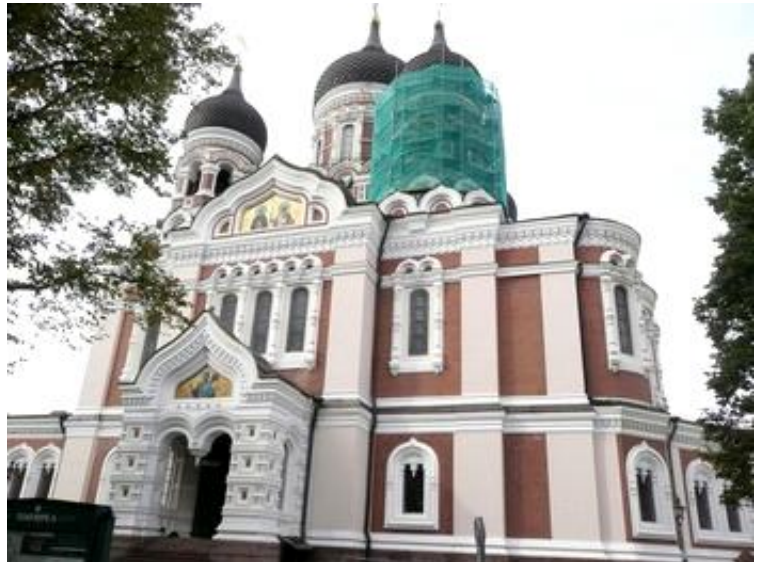
ここで、アメリカのシアトルからツアーで来ている高齢日本人女性との出会い・会話もあった。ウクライナ、モスクワ、タリン、ヘルシンキというツアーだそう。私より一まわり以上年上の彼女の話の聞いていると何か勇気づけられる。

城塞の出口の近くに日本大使館を見つける(右写真)。ヘルシンキのビルの一 corner の日本大使館とは大違いだ。桜が植えてあった。



城塞のなかには、歴史性のある教会などの建物が並ぶ。

中右は、アレクサンダーネフスキー寺院



写真は、トームペア城



この国は、スウェーデンとロシアの長い支配の後、ようやく独立したフィンランドと似た歴史をたどっている。タリンは、ヘルシンキの歴史よりはるかに古い。一時果たした独立も、他国支配下に戻され、ようやく最近独立を果たしている。交通の要所だけに、そうした歴史が作られたのかもしれない。

ちなみに、フィンランド語に似た言語はエストニア語だけだそう。





左は、聖マリア寺院  
右は、城壁

城壁の端には見晴らしのいい場所がある。(右と下の写真)



オールドタウンを見ると、それだけの歴史的価値を感じる。

夕方、帰りのフェリーに乗る。想像通り、酒などの買出しを終えたフィンランド客が多い。

わずか6時間の滞在だったが、私の訪問国が一ヶ国増えた。人口が沖縄と同じくらいのこの国が、今後どう展開していくのか、興味もたれる。相撲力士「把留都」を通してしか知ることの少ない、私たちにとっ

て、エストニアをふくめて、こうした国の現在、将来に関心を持つことは、日本や沖縄の将来にとって、示唆的なことが多くなりそうだ。

ここでは、フィンランド同様、実に多様な地域から観光客がきて、多種類の言葉が飛び交う。

それに比べると、日本を訪問する外国からの観光客の種類は少ない。



写真は、城壁南端から見る、オールドタウンの外側のエストニア風景



## クラフト展

9月19日夕記

フィンランド在住の方から得た情報をもとに、港近くの会場で土日開催のクラフト展・即売会場に出かける。

途中で、エスプラナーディ公園の写真を撮る。いわば大通り公園で、何度も通ったところだ。ヘルシンキ大学の新入生の仮装グループが「活躍」したところでもある。

クラフト展は入場料10ユーロ。女性客が80%。多様な世代だが、年齢層は比較的高そう。男性は私と同世代が多いか。展示品が、女性に親しみやすいものが多いためだろうと思う。

100ぐらいもある展示スペースは、会社が出しているところもあるが、家族協同で製作するといった感じが多い。

ともかくたくさんの人出だった。

あるショップの前で、写真のように、子どもに引きひもで結びあっている母親がいた。

話しかけたら、話がどんどん進んだ。「写真をとってもいいか」と尋ねたら、OKだった。







人ごみの中で迷子にならないための工夫だという。手をつないでいると、子どもも窮屈に感じて、このほうが好きだ、との話。

話がすすんでいくと、父母、18歳の娘と赤ちゃんの四人で、自分たちで製作したものを、その店を売っていたのだった。馬・猫・エンジェルを題材にした焼物・絵などだ。

こんな風に、いくつかの店で話が弾んだ。自ら製作した木工作品の説明が英語では難しいと感じて、娘が対応した店で写した写真が、椅子の写真だ。なかなか素敵なデザインだが、持って帰れないから、許可を得て写真をとった。その店では、料理用の木工道具を買った。このお父さん、職人らしく熱心に素材などを説明してくれた。

ある店では、押し花・押し葉でとっても美しいカードを作ったものがあった。この6枚で10ユーロとは、申し訳ないような安価だった。





別の店では、素晴らしいデザインのカップというか、小物入れというか、そんなものに出会った。2個セットで買うと割引ということだ。1組買った。

どう使うかは、検討中

## 鬱を直す器具・古風なエレベーター

9月20日夕記

フィンランドは、緯度が高く太陽が低いし、秋から冬にかけて日照時間が急速に減ってくる。秋分の日直前の今日も、どんどん短くなるのを感じる。

地元の人たちの話では、11月になると、鬱気分になりがちだそう。職場でも集中がとぎれたりするという。ということで、太陽光を浴びるのと同じ効果のある電球？を浴びる器具がある。写真はその器具だ。9月ころから浴び始めて、徐々に増やしていくという。本によると、うつ病の治療器具の一つになっているということだ。



また、ある地元の人には、最近、それに類したものとして、耳穴に光を当てる器具が出回りはじめたという。鬱でもない娘たちが、「試し」ということで、早速購入してきた。私もやってみた。

個人によって効果は違うということだ。私の場合、すぐに耳穴が暖かくなり、そのうち後頭部がちょっと痛くなる。他の人の場合は、そんなことはない。私には合わないのかな、と思う。

それにしても、いろいろなものが作られるのだな、と思う。鬱対策に関心の高いフィンランドらしいなと思う。

ところで、地元のあるアパートメントには、大変クラシックなエレベーターがあり、思わず写真にした。鉄格子に似たものでできており、日本だと30年以上前には消えたタイプだと思うが、大切に継承されているようだ。





## 起業を支えるテクノポリス

9月20日ター21日午前記

9月20日朝、研究調査に便乗して、テクノポリスを見に行く。アパートメントから近くのヘルシンキ・バスセンターからバスで行く。ちょうど出勤ラッシュ時間で、10分間隔のバスだが、満員だ。都心から郊外向けのバスが満員とは、日本では珍しい光景だ。

行き先は、隣のエスポー市内のオタニエム地区だ。IT産業が集積しているところで、ヘルシンキ工科大学もある。



テクノポリスは、ベンチャー企業を起こそうとする、または、起こし始めた、あるいは、起こして軌道に乗りかけた、そういった動きを支える場、施設だ。

巨大なものだ。フィンランド内外に拠点をいくつも持っているが、ヘルシンキ近郊のこのものは、かなり実績をあげているようだ。私の専門外なので、わからないことだらけだが、びっくりすることが続出。

建物の外観からしてすごいが、中もすごい。すべてデザイン性があふれている。フィンランドらしく

木製品がうまく使われている。無機質のなかに、温かみを加えている。

大きな建物が二つあるが、上写真は、そのうちの一つの全景。中写真は、前景。

下右写真は、同じ建物のレセプション。下左写真は、同じ建物の内部を見渡す



テクノポリスの内部施設は、IT関連の起業を支援する機能が豊かだ。ビデオ会議室は、世界のどこでも会議ができる方向で準備されている。

起業家たちのためのミニオフィスには、一人用の事務室が連なる。事務機器の販売やレンタルのサービスが受けられる。自動車の洗車サービスまである。共用の会議室などいろいろな用意されている。



ミニオフィスが連なる



レセプションには起業社名が並ぶ。



極め付きは、最上階にある、サウナ付きの会議室だ。会議を終えたら皆でサウナに入るといふ段取りだ。







窓からは美しい森が見える.

こんな所で起業すれば、成功まちがいなし。環境が良すぎて、かえって、か。

これまで紹介してきた建物1に隣り合わせて、大きな建物2がある。

建物2



講堂。



似た作りだが、建物1になかったものとして、講堂と教室がある。

教室は、数人収容で、IT機器が装備され、充実した授業ができる印象だ。

ビデオ会議室



会議室のサウナ



このサウナ付き会議室には、大きな室内バーベキューグリルまで用意されている。



ここには、建物設備などのハード面を業務とするテクノポリスとペアで、起業支援を直接担当するスピノーという組織がある。そのスピノーの専門家から、インキュベーションについての説明を受けた。

アイデアを持ち込む起業志望者にたいして、いろいろな援助をしていく。志望者のうちの1/3が起業候補になり、そのまた1/3が起業し、そのなかの何分の1かが軌道にのるわけだが、その過程のサポート例がたくさん説明される。自信にあふれて、楽しい事例をたくさん紹介された。

こうした専門家が何人もいる。MBAをもち、若いころから、10年、20年と、この仕事に携わり、実際に、今では著名な世界規模の企業を育ててきたようだ。日本の場合は、銀行とか企業を退職したベテランが担当するような仕事かもしれない。

ここでは、産業／教育における日本との違いについて考えさせられた。たとえば、アイデアを持ち込んだ起業志望者にたいして、市場化し利益を得るようになるにいたるまでの間に生じるであろう諸問題を発見し、その問題を解決していくことについて、志望者自身にうんと考えさせるのだ。

ここは、学校を卒業して、企業人になる間の過程を教育する機関だといいかえてもいいような感じさえした。日本の場合、学校から仕事への過程は、就職活動、そして新入社員教育に焦点化されるが、ここでは、その過程がもっと広いのだ。

こうした問題発見／問題解決型学習が、小学生段階から行われるフィンランドと、大学、ないしは大学卒業後にはじめて少しばかり行われる日本との違いは大きい。

また、この過程が、多種多様なつながりを作り出していくものとして行われ、それほど競争的でない点も注目される。

こうしたことが、人口500万のフィンランドで行われ、しかも世界的企業をたくさん生み出している点、大変関心がもたれる。

このあたりのことは、深めて考えて行きたい。

写真は、スピノーの入り口





## 保育園訪問

9月21日午前記

9月20日午後、恵美子の希望で、2度目の保育所訪問した。恵美子はここに来て、どこか保育園訪問をしたいと、インターネットで調べた。そのなかで、ベロニエム・デイ・ケア・センターが注目されるという。住所表示はみつからない。ベロニエムという地名を頼りに、私が場所を調べ、見当をつけて出かけた。

目当て場所の近くになったら、たくさん子どもと遊ぶ保育集団を見つけた。先生と思しき方に声をかける。すると、目当ての保育園ではなく、別のスウェーデン系の保育園だった。

もう少し行って、ベビーカーと一緒に一緒のお母さんに話しかけて、尋ねる。その人は、この地域に住んでいないからわからないけど、といいながら、自分のアイポッドで、保育所の名前を調べ、探し出す。そこにもう一組の親子がとおりかかり、2組がかりで場所を探し出してくれた。

その通りにいくと、公園らしきところで、たくさん子どもが遊んでいる。親も何人かいる。一人に聞くと、それは、ベロニエム・デイ・ケア・センターの園庭で、向かいの建物にセンターの入り口あるとのこと。そこにいくと、リトアニア大使館の表示。(右写真)

写真のなかの中央に、フィンランド語で「昼の子ども家」と書いてあるとは、後でフィンランド語がわかる人から聞いた。私たちはわからない。下側の表示は、英語表示があるので、リトアニア大使館と分かる。

そこで、近くの入り口などを探すなど、迷った挙句、中に入ると、デイ・ケア・センターを発見。ブザーを鳴らすと、男性教師があらわれ、突然の訪問にもかかわらず、中に入れてくれた。



3時40分ごろだったが、ちょうど降園時間で、子どもたちはすべて、先ほどの園庭で迎えを待ち、建物のなかは教師たちのまとめ作業や清掃時間だった。

写真は保育所風景

各部屋を案内してくださった。子ども数70名、教師数は10名で、男女半々。筋肉質な二人の男性教員が私には印象的だった。他に食事清掃担当が2名。ヘルシンキ市が運営する。3歳

から6歳までで、6歳はプリスクールだ。雰囲気がとてもいい。

右写真は、物語を作りながら遊ぶ、「空飛ぶじゅうたん」だ。恵美子がインターネットで調べて注目した実践に使われるものだ。



補足 9月20日朝配布されたヘルシンキ市発行で年6回全戸配布される Herusinki info 紙には、デイ・ケア・センターについてこんな情報が掲載されていた。

全部で24ページあるうち英語で書かれているのは、1/2ページだけで、くわしくはインターネットサイトを参照とのことだ。その記事によると、ヘルシンキのデイケアセンターには、13%の外国生まれの子どもがおり、園によっては20%になる。言語の数は80に及ぶ。このように、フィンランドも多文化多言語的色彩を強めているようだ。



## 植物園再訪

9月21日午後記

20日午後、保育園のあと、植物園に行く。私には再訪となる。

そこに入る前に、交差点の街角コーヒー店に立ち寄る。一杯1ユーロで、おいしかった。私は気づかなかったが、恵美子は、店の主は妊娠中だそう。妊娠中の人をよくみかけるそうだが、私は一度も気づかない。

が、私は一度も気づかない。

前回訪問から10日余りたつ植物園では、ぼたんの花が印象的だった。美しい写真を並べよう。







アスパラガスを発見



見たことがないキノコも見た。雨続きで、キノコがよく育つようだ。地元の話では、いまが雨シーズンだとのこと。

## 湖・中央駅・ベリー

9月21日午後記

20日のお出かけの最後は、植物園を出て周辺を散歩し寄り道をしながら帰る。

植物園の北側の湖がきれいだった。





中央駅の植物園側の丘から見た列車もきれいだ。



ここでは改札口はない。ホームには自由に出入りできる。  
駅ホームで、ブルーベリーなどの3種類のベリーを買って、  
アパートで食べる。おいしい。ベリー収穫の季節のようだ。

## テンペリアウキオ教会再訪

9月21日夕記

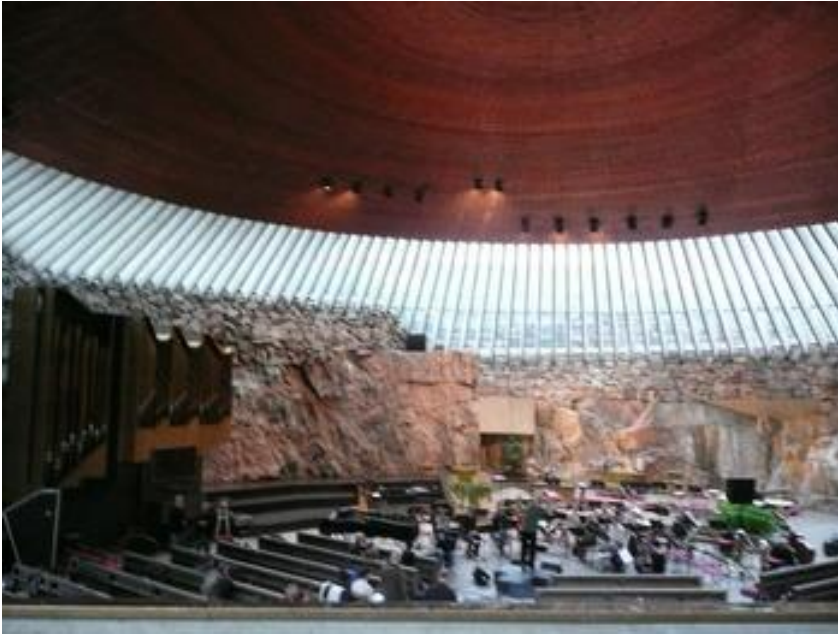
今日は一日雨。これまで、こんなに降り続くことはなかった。さすが雨のシーズンだ。ヘルシンキ滞在も最終段階。

午前中ゆっくりとアパートを出て、テンペリアウキオ教会に向かう。

ちょうど、吹奏楽プラスアコーディオンの







グループが練習していた。オーケストラに近い。教会でオーケストラに類したものをするのは素敵だ。岩に囲まれた教会なので、音響的にどうなのかは、わからないが、興味深い雰囲気をつくる。

その後、カッペンにあるテニスパラッチ=ヘルシンキ市立美術館に行く。フィンランド美術と思いきや、南アフリカの現代美術作家の作品の企画だった。差別など現代南アフリカをめぐる状況への強力なメッセージを放つものだった。先日購入したきつねと熊の小さな絵も、フィン

ランド作家のものではなくて、南アフリカ作家であることをここで知る。メルヘン調の作品だと思っていたものが、実は風刺的なものであることを知る。わからないものだ。



## ラップランド料理

9月21日夕 記

21日の昼食は、思い出つくりの意味もこめて、すぐ近くのラップランド料理に行く。

ラップランドは、北極圏内にあるフィンランドの北部地方だ。

びっくりするほどの値段でもあるし、ここのレストランの量はとても多いので、半人前の注文をする。

右写真は、トナカイのチーズ風味スープ。

下写真は、みんなでシェアしていただいた主菜の、「野生の盛り合わせ二人前」。



ヘラジカのサーロインステーキ、カモシカのソーセージ、トナカイの煮込み。

ステーキは、牛肉の味を濃くした感じ。ほかのものも、味が濃厚だ。

このほかに、野菜のオープン焼き、ポテトとクリームソース添え、シーザーサラダ、きのこスープをいただく。

半人前で正解であった。満足して店を出る。

## 買物 9月21日夜記

21日夕方、すぐ近くのカンピョッピングセンターに買い物に出る。いつも駅前商店街などにでていたが、こんな近くに大規模なものがあるのに気づかなかった。

このセンターは100ぐらい店があるらしいが、店の個性を保ちつつも、全体としてのデザイン統一が美しい。ここに限らず、どこに行ってもデザイン性を感じるのが、この国の特徴だろう。

美しい店なので商品価格が高いという、というものでもない。衣類でいえば、百貨店とスーパーの間というべきか。



ここで買ったのは、孫へのみやげと、私の収集のためのぬいぐるみ人形だ（ふくろう）。

とってもかわいいし、手頃な価格。製造国は、フィンランド、スウェーデン、ドイツと多様だ。

上写真は、ぬいぐるみ。となかい りす ムーミン  
左写真は、ふくろう



## アモス・アンデルセン美術館

9月22日機内メモ・28日記

ヘルシンキ滞在最後の22日午前に、すぐ近くのアモス・アンデルセン美術館に行く。実業家が自ら収集した美術品を、没後、当人が住んでいた住宅に展示したということらしい。

右写真は、美術館の外観







展示物はさておき、ここの美術館のトイレが、デザイン性溢れるもので美しかったので、つい写真にしてみました。フィンランドは、さりげない生活空間のデザイン性がとってもいい。

さて、ここでの話題の一つは、若い美術館員とたくさん話したことである。私たちからではなく、彼女の方から話しかけてきて、長話になった。

ヘルシンキのどこの美術館に魅かれたか。

ヘルシンキの印象はどうか。・・・などなど、この旅日記で書いてきたようなことを話した。

彼女は、日本にとっても関心があるらしく、日本のどこに住んでいるかなど、日本のことも尋ねてきた。彼女に、このブログのアドレスが書いてある名刺をあげた。最近では、英語名刺をもっていないので、すべて日本語だけど、アドレスだけはわかる。こんな風に、日本に関心を示すフィンランド人には他にも出会い、名刺をあげた。

話題の一つは、フィンランドと日本の違いと共通性だった。

開館まもない平日の朝なので、美術館員もゆとりがあるのだろう。そうしたユトリを見せてくれる館員がいること自体がうれしい。他の館員にも声をかけられて、あの部屋は見たか、などと声をかけられた。

初対面は、無愛想に見えるフィンランド人だが、実は人懐っこいのだ、と私は思う。

## 振り返り

9月22日午前記 現地で書く最後の日記

今日夕方のフライトで、帰る。時差が6時間（サマータイム期間）あるので、日本時間で23日午前9時に中部国際空港到着。乗り継いで午後に帰宅となる。

16日間の滞在。トロントに1年間滞在した以外は、1週間以内の旅なので、長期は今回が初体験だ。旅というよりも滞在という言葉が似合う。

計画なしの滞在なので、ゆったりしたペースだった。平均して、一日3〜5時間外出。それでも長期滞在なので、ヘルシンキ市内の主だったところはほぼまわったようだ。

ヘルシンキ以外は、隣のエスポーの二ヶ所だけだが、他のところは、次の機会にしよう。とはいっても、来る可能性はそんなに高くはない。

出会ったフィンランド人の印象。道ですれ違うときは、無愛想な感じ。ヌークシオ国立公園ですれ違う人は、たいてい無応答だった。しかし、いったん会話が始めると、とても親切に明るく話が進む。セウラサーリ島の「大

工」のお兄さん。突然訪問のデイケアセンターの先生。訪問先のお宅の方々。印象深い方々が多い。

海外に出ると、安全が気になるが、ここはとても安全だ。都心滞在なのに、日常生活で警官に出会うことがとても少ないことがそれを示しているだろう。恵美子がカバンを忘れたときも、隣のお婆さんがわざわざ呼び止めてくれたし、傘を忘れた時、写真を買ったお店の人が、わざわざ持ってきてくれた。

物価は高めだが、外食を減らせば、そんなに高くつかない。

英語が通用するという話だが、確かにそうだ。しかし、英語表示は多くない。

料理は「それほどには」と書いてある本に事前に出会ったが、私には悪くなかった。トロントなどでもそうだが、多文化のものに出会えるし、むしろ豊かかもしれない。グルメ嗜好の人にはどうだかわからないが。

街のあちこちで、また人々の暮らしのなかで、デザイン性のよさが目についた。飾りがすごいというのではなく、シンプルで機能性に溢れているところがポイントだ。シンプルななかに美しさを感じさせるのは、そういう文化の蓄積がかなりあるゆえだろう。

色はモノトーンに近いものが多い。地味さのなかに美しさを追求しているといってもよいだろう。沖縄感覚でいうと、もう少し、明かり、光を強く感じさせるものがほしくなるが。

## 土産物

9月22日メモ、28日記

22日午後、フィンエアウェイのバスで、空港へ。飛行機は満席で、席が確定したのは、搭乗直前。しかも二人並びの席ではない。行き同様、ヨーロッパ各地からの人が乗り継ぎで乗るからだ。搭乗後、これまた離れ離れになっているグループがあり、席を交替しあって、恵美子と隣席に坐ることができた。

空港では、残ったユーロで、土産物を買う。一つは、旅日記の最初の方で話題にした、ベリーの果実酒だ。地元の人に、どれがいいかを聞いておいたが、それを見つけて購入した。

2, 3回も出かけて買っていなかったフィンランドのブランド磁器を買う。いくつかブランドがあるが、デザインがシンプルで、機能性も高く、気に入っていた、イッタラのマグカップを購入(写真)。他にお菓子なども買った。

二人での外国旅行は、4年ぶり。ウィーン、ドレスデン以来だ。二人での外国旅行を通算すると、7, 8回目かな。すべて、団体旅行ではなくて個人旅行なので、旅の最中、けんかするわけにはいかない。助け合いが必要になる。今回は娘夫妻といっしょのこともあったが、大半はふたりでの行動だった。





## 滞在型個人旅行のおすすめ

9月28日 記

外国旅行は、大半の日本人にとっては、団体のツアー旅行が多いだろう。それはそれで素晴らしい体験となるだろう。私のように、自分なりのペースで、自分が体験したい事をするというタイプにとっては窮屈だし、余りに忙しすぎるとは思うが、体験がない人に、自分なりに計画を作るというのは、大変難しい。

それにしても、回数を重ねるごとに、旅行社の助けを借りながら自分でプランを作り、自分で行動する個人旅行のほうへチャレンジしてほしい、と思う。それへの過渡期として、団体ツアーでありながらも、フリープランを含むものがあるようだ。

それらを経て、個人旅行へとすすんでほしい。そうなってくると、旅行社だけでなく、現地在住の人とのネットワークで動くことも出てこよう。なかには、仕事で、あるいは家族が在住する、あるいは、知人がいる、ということがきっかけで旅行する人もいる。私などは、そうしたケースが多い。

そうすると、観光スポットをまわる旅ではなく、人と会い、交流することを含む体験滞在型になってくる。

日本人の場合は、こういう流れの展開が多いだろう。しかし、トロントにいた時も、今回のフィンランドでもそうだが、観光ではない形での外国旅行、外国滞在の人が多し。生活のために行き、滞在するのだ。学校通い、仕事、NGO業務、結婚といったのがそう。さらには、カナダのように、移民難民の人も多し。

そういう意味では、外国訪問の視野のなかに、観光以外があることを考えて欲しい。観光だけでなく、友好交流を目的とする、自治体主催の姉妹都市行事などもその一つだろう。

いずれにせよ、いろんなチャレンジをして、地球人へと成長していきたいものだ。

ところで、海外での言葉問題をどうするかが、日本人には関門になっている。だが、たいていの人は、6~9年間、英語学習している。他国と遜色があるわけではない。私なども、中高大、8年間は英語学習した。しかし、会話学習はゼロで、50歳代になってはじめて英会話学習を始め、外国滞在生活を始めた。

先日、英語は1000時間の耳慣れが必要だ、という説を聞いた。しかし、50歳以上になると、1500時間ぐらい必要だ、というのが、私の実感だ。私自身は、数百時間英会話に接しているのに、成長がとても遅いのだ。

ところが、そんなに長い時間勉強していない外国人がどんどん英語を話す。フィンランドで、私が英語で話しかけたら、全員が英語で返してきた。ただ一人だけ、クラフトショップの高齢者が、途中で娘にバトンタッチしただけだ。フィンランドで英会話する時は、第二、第三言語どうしであるので、お互い気楽に、間違えつつ、苦労しつつ英語を話している、という気持ちになり、気分が楽だし、ゆっくり話すからいい。

私の考えでは、大切なのは、自分から英語で話しかけることだと思う。残念ながら、日本の学校での英語教育、とくにテストでは、自分から話しかける場面に無に等しいのだ。

自分で話しかけることの有効さを、実演したのは、恵美子の保育園訪問だった。道でベビーカーといっしょの母親に話しかけて、近くの保育園を紹介してもらい、アポなしの保育園訪問を二度も成功させたのだ。外国生活経験が私より短いのに、彼女の大胆さは、英語力どうのこうのというわけではない。彼女の「魔力」に相手がついてくるという感じだ。いずれの保育園でも、私たちの予想よりずっと親切に対応して下さった。

英検とか、TOEICとかTOFELとかで高得点をとるだけでは十分ではない。実際に話しかけることだ。

私の場合も、これらのテストは一度も受けたことはない。でも、いつも「英語力がないのに、話しかけている」と言われてきた。必要なのはチャレンジだ。

私にとって、この体験は大変貴重だった。計画なしの滞在型「旅」が良かったということもある。

また当然、フィンランドの興味深さ、そしてエネルギーに新しい発見があったこともある。20世紀初頭まで「不遇」の位置に置かれてきたのが、なぜこうもエネルギーに動いているのか、そこには興味深いことが底深くありそうだ。また、沖縄と共通する面が見られるのも、興味深いことだ。

ということで、研究的関心も湧いてきている。機会があれば、さらに現地の人々と意見交換のために再訪してみたいとも思っている。

関心事は、私の専門分野の教育ということには限っていない。今回の旅はむしろそれ以外の事ばかりに首をつっこんできた。今後、それ以外のことと教育との関係も考えてみたい。

私にとっての最大の問題は、カナダ同様、寒いことだ。そして、カナダ以上に日差しがとっても弱いことだ。でも一か月以内なら耐えられそうな気がする。



# 2011年9月

## ヘルシンキ到着と森散歩

前年と同じ時期に、ヘルシンキに滞在した。

今回の旅は、当初、「まじめ」な仕事と「楽しい遊び」半々のつもりだったが、実際は、「まじめ」な仕事7~8割になってしまった。「まじめな」話のファイルに掲載するだろう。



ではスタートしよう。

5日に飛行機に乗る。乗ると満席。どうやら、前日まで台風欠航していたので、変更して搭乗した人が多いようだ。ほとんどがヨーロッパ各地へと乗り継いでいく人たちで、ヘルシンキで降りる人は、数えられるほどだ。

ヘルシンキのこの日は意外に暖かく、20度ぐらいだ。

荷解きした後すぐに、近くの公園というより、森といってよさそうなところへ散歩に出かける。

冗談だと思うが、地元の人はこの森はラップランドまで続くという。でも、真実に近そうだ。北極圏のラップランドまでは1000キロ以上ありそうだ。南端では、自然林というよりは、植林が多そうだが、それでも、100年200年はたっっていそうな木々

だ。

森の南端に隣接するのは、オリンピック公園であり、ヘルシンキ中央駅まで2キロぐらいのところ。国の南端にある首都中心近くから国の北端まで森が続くというのは、ステキなことだ。

森を歩いていると、高さ2メートル足らずが立木のままだ残っている倒木に、「胎児」が彫ってある。プレートに作者などが書いてある（中写真）。

森の南端近くには、馬の飼育や乗馬練習場（障害物レース向け）があり、馬の道も整備されている。（右写真）





6時間の時差があるので、8時には就寝。10時間眠る。

右の写真は、ヘルシンキの宿泊先すぐそばのトゥールー湖だ。



## セウラサーリ再訪

昨年、2度も訪れたセウラサーリ島も、宿舎に近い。徒歩で30分もかからない。美しい光景が多い。



ここは、学校からまとまって来る子どもたちが多い。あるグループは、先生が英語で話し、子どもたちはフィンランド語で話す。ここは徒歩なので、近くの学校だろう。遠くからバスでくる学校もある。

島の中には美しい泉が多い。(中写真) きのこの季節でもある。(右下写真)

島の中には、「野外博物館」ということで、古い建築が残されている。



左下写真は、釘を使わないログハウス。丸太そのままではなく、カットしてある。





## 森歩き・市民農園

3日目の朝、例のラップランド?まで続く森をどンドン歩いて見る。途中、道路、鉄道をくぐる。ともかくどンドン続きそうな気配。



途中、市民農園と思しきものに出会う。  
(中写真)

スイスチャード、ポリジなどのハーブ、野菜などが見られる。でも、そろそろ季節が終わる気配。

頭を使う日々だし、健康維持のためもある。時間があれば、ともかく歩いた。インタビュー会場へも、40分ぐらいで行けるところは歩いた。

ところで、私の携帯電話、高齢者向けのラクラクフォンは、国際仕様ではない。去年は、間違った説明をうけて、あやうく到着したばかりのヘルシンキで、迷子になりそうになった苦い体験がある。

でも、時計として使える。6時間の時差を直さないで、換算して使用。そして、歩数計として大活用。

ちなみに、滞在の日々の歩数を記そう。

15日	10177	14日	10609	13日	10216	12日	17142
11日	16574	10日	15848	9日	9056	8日	19760
7日	26478	6日	17429	5日	7206		

1日平均15000歩だ。こんなに歩いたのは、前例がない。お陰で、沖縄に戻ってから体脂肪計にのると、体脂肪も内臓脂肪も体重も、ぐんと減少。

## オリンピック公園 トゥールー湖

宿舎から、インタビューの場所になることが多いヘルシンキ中心部まで徒歩でほぼ40分。たいていは、オリンピック公園→トゥールー湖畔→中心部→会場というコースで徒歩移動。

オリンピック公園（右写真）は、1952年のヘルシンキオリンピックの施設などで構成される。高い建物は聖火台に使われたらしい。私が6～7歳のころで、水泳で古橋が活躍した時か。私の脳裏にかすかに残っている。世界の戦後復興の象徴のようなものだ。

すぐそばに、サッカー場もあり、私が着いた翌日ぐらいに、オランダとフィンランドの世界サッカー予選があり、フィンランドが善戦したそう。



オリンピック公園の南側にトゥールー湖がある。冬場は凍結し、湖面を歩いて渡る人もいるとのこと。

湖畔には美しい建物が多い。





## ヘルシンキ街風景

インタビューへの徒歩往復で出会ったいくつかの風景。

### 1) フィンランディア・ホール (トゥールー湖畔)



2) 大聖堂。昨年はこの広場に世界のたくさんの国を象徴する白熊像があったが、今年はない。

### 3) あるインタビュー先で見た、コーヒーメーカー (右写真)

自分で好きなコーヒーの袋を入れると、コーヒーがでてくる。普通のものと同じ構造だが、自分の選択で一人分のものでドリップされてくるのがミソ。

フィンランドは、コーヒーの一大消費国。どこに行っても、コーヒーが出てくる。自分で選択して用意する場合が多い。クッキーなどを選択できることもある。





4) フリージャーナリストたちが、国会議事堂に請願デモをしている光景。これまでなかった新聞への消費税課税実施に反対などの内容らしい。小国だが、フリージャーナリストがこれだけたくさんいて、労働組合を組織しているのも興味深い。

5) 昨年工事中で入れなかったヘルシンキ・ミュージックセンター(芝生)から、フィンランディアホールを見る。

ここが中央駅すぐ近くなのだ。他の国では想像ができないだろう。



6) 左写真は、Forum Virium Helsinki を紹介するパンフレット。

こんなものにもデザイン性が溢れる。



## 冬の庭園

オリンピック公園とトゥールー湖にはさまれた位置に「冬の庭園」がある。なぜ、そんな名前かはわからない。私の推理では、大型の温室になかに、ヤシなどが植えられていて、冬でも楽しめるからではないか。

その温室を始め施設全体が改修中なので、入り口付近しか入れない。それでも満足できる。

この時期、あちこちでバラが満開だが、ここもそうだ。典型的なヨーロッパスタイルだ。





## 柳 花々

トゥールー湖畔には、柳の大木が多い。幹の目通りは2メートルを越しそうだ。樹齢はどのくらいか。100年以上。もしかして200年以上か。トロントにも、このような大木があったのを思い出した。「かえるが枝にとびつく」という日本の柳のイメージとはまったく異なる。



ところどころ、芝生と花壇がコントラストをなして作られているところがある。写真は、ヘルシンキ中央駅からトゥールー湖畔に行く道の傍ら。紫はセージかラベンダーか。





## トラムの検札 自動車運転

### 交通関係の話題

トラム（ストリートカー、路面電車）は便利だ。市内中心部では特に便利。他に、鉄道（近郊路線と長距離路線、セントペテルブルグまで行く国際列車もある）、バスなど公共交通機関が凄く発達している。車社会ではあるが、公共交通機関がこれだけあるのは、旅のものにとっても助かる。

タクシーも多いし、価格が安い。市内の主な地点の移動は、1000円前後で可能だろう。かなり距離のあるヘルシンキ・バンタ国際空港までも3000円くらい。バス使用だと、6～7ユーロ。

オートバイ・スクーターの類いは少ない。自転車は多い。歩道と自転車道がはっきりと区分されているのもいい。

自動車の運転は、私から見ると急発進急停車が多いが、日本の都市と同じくらいか。沖縄より激しいが。歩行者に対して、自動車運転手はとても親切。横断歩道で立っていると、止まってくれる車が多い。

トラムに乗った時、検札に出会った。交通量調査も兼ねているのか、乗車駅と下車駅を、調査票に記入していた。男女3人組のやさしそうな職員だった。日本のように、乗車下車の際に料金支払いといったシステムは、他国では余り見かけない。指定購入店で買うと2ユーロ、乗車時に運転手から買うと2ユーロ50セント。乗車時下車時に切符を見せるとか渡すとかはない。信頼関係で成り立っている。

検札もめったにない。いくつかの国で乗車したが、今回初体験。

検札に出会って、サッサと下車した若い女性、高校生ぐらいの2人組がいた。制度がゆるいので、無賃乗車する人もいるようだ。摘発されると、100ユーロ近い罰金が取られる。そのシーンを見たことはない。

写真は、本文と関係ないトゥールー湖畔

## ムーミン絵本 フィンランド語

ヘルシンキの目抜き通りにアカデミア書店がある。大きな書店で、フィンランド随一の書店かもしれない。フィンランドは、一人当たりの読書量が世界のトップクラスらしい。長い冬の時間や、人々の知的で真面目な雰囲気から、容易に想像がつく。

私は、フィンランド語はほぼ完璧にわからない。分かるのは、次の単語くらいだ。



ヨー はい  
 キートス ありがとう  
 オイ 会社

ローマ字を使用するが、ヨーロッパ語とも全く異なる。似ているのは、エストニア語だけ。

フィンランドでは圧倒的多数が、フィンランド語を母語とする。数%の人がスウェーデン語を母語とする。だから、この二つが公用語だ。英語は小学校から教える。そして、ほとんどの人が英語を使える。日本のように、読み書き英語にとどまるのではなく、聞く話すも十分できる。だから、英語を使える人は、フィンランド生活ではほぼ困らない。

ある時、フィンランド語で話しかけられた。英語で返したが、通じないらしく、またもやフィンランド語で話しかけられる。そういう人もいる。

といっても、道路標識などはフィンランド語とスウェーデン語の二言語表記なので、私には難しい。スウェーデン語の方は、ドイツ語に近いらしく、欧米言語の単語に似通ったものが多く、そこから想定して意味を汲み取ることができることもある。



書店でも、圧倒的にフィンランド語の書籍だが、少々の英語本が置かれている。

恵美子から絵本を買ってきて、と頼まれていたので、探す。絵本コーナーで、英語本を探すと、圧倒的にムーミン本が多い。そこで、ムーミン本を、英語版3冊フィンランド語版1冊を購入。

楽しい本だ。

## ストックホルム船旅

週末、ストックホルムまで船旅をする。何万tもある巨大クルーズ船だ。シリアラインという会社のセレナーデ号である。毎日、夕方ヘルシンキを出て、翌朝ストックホルムに着き、再び夕方出航して翌朝戻るというコースだ。2つの船で、毎日往復している。もう一つバイキングという会社







も同様に運航している。

船上は、世界からの客もいるが、圧倒的にフィンランド人だ。いわば【週末休暇宴会コース】という人々が結構多い。船内の免税売店で、酒を買い、宴会をするのだ。大学の新生歓迎行事と思しきグループもある。船内には、大型会議室などもたくさんあり、インタビューしたある労働組合の人が、毎週どこかの組織が、ここで会合を開いているそうだ。船で学会を開くなどもできそうな雰囲気だ。

読者のみなさんは、値がはるのではないかと心配かもしれない。私も日本でのクルーズ船の価格を想像していたが、その10分の1くらいなのだ。往復船賃で、合計一〇〇〇〇円。バストイレ付の3人船室で、これが最安値だが。

船室は、日本でいえば、ビジネスホテル並み。1泊2日ホテル付き交通費10000円などというのは、通常価格として、日本ではありえない。

12階建て船内の7階には、大型モールに匹敵する店・レストランがある。ピアノ演奏・大道芸などもある。

サウナももちろんある。

この旅で、スウェーデン訪問して、私は12ヶ国に行った計算になる。6、7時間しか滞在しないというのは初体験だ。

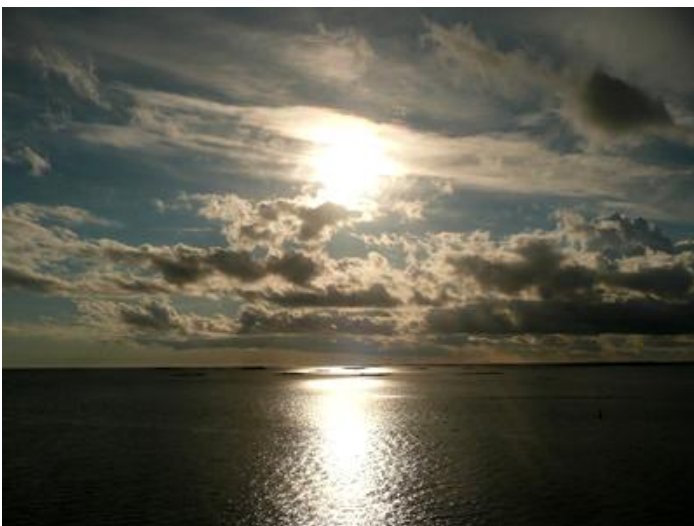


#### 写真説明

前ページ 12階の甲板。煙突自体が数回建てに匹敵する。この甲板で、私はバルト海、フィンランドとスウェーデンの島々、夕陽朝陽月などを堪能した。

上左 船室 (3人部屋)

中右 7階のモール



出港してしばらくして、夕陽シーンとなる。

反対の東の空には、12日月がでている。当たり前のことだが、地球上では、月の満ち欠けは同じ月

日だ。それが何故だか不思議に感じる。

「日は西に、月は東に」 大型船だから、甲板上で、たやすく見られる。



私たちの乗ったクルーズ船は、夕方5時出港。

出港して船上から、ヘルシンキの町並みを見る。

すぐに、世界遺産でもあるオメニリンナ島の間をくぐって、船は進む。バルト海をにらんだ要塞である。今は主として観光資源となっている。私は昨年訪問した。

下写真は、島の南端。このあたりに砲台などがたくさん置かれている。







翌朝、甲板に出ると、スウェーデンの島々を縫うように船は走る。こんなに島ばかりとは知らなかった。

寒い。広い甲板だが、人の気配は、一人二人ぐらい。昨夜の宴で、眠っている人が多いのだろう。

朝日が出る。私の独占状態。

朝日に、島々が照らされる。建物は、休暇向けのものだろうか。



日はさらに上がる。

空が明るくなり、船がさらにすすむと、スウェーデン風景が目に入る。ヘルシンキの島々と大きな違いを感じない。

かつての要塞の跡のような感じの施設も見られる。



朝日がさらにのぼって、新鮮な朝の雰囲気が立ち込める。

ストックホルムの港に入る。

同じEUなので、出入国手続きはない。ユーロを使わないスウェーデンなので、両替をしようとするが、する場所が見つからない。結局、おおよそにおいて、ユーロ使用可なので、両替なしですませた。







港からストックホルム中心へはバス移動。  
ストックホルムをヘルシンキと比べると、  
歴史の長さ、王国の歴史、洗練のされ方な  
どの違いを感じる。それには、かつてフィ  
ンランドが、スウェーデン領だったという  
歴史が反映しているのだろう。

いくつか建物を紹介しよう。  
上の写真はバスの車窓からとる。



中央駅には、右の写真のようなファ  
ッショナブルな建物がある。



市庁舎前広場から対岸の旧市街を見る。

ストックホルム滞在時間が限られているので、市の中心部で、普通の観光客が行きそうなところを回る。

ノーベル賞授賞式の市庁舎は、中央駅の隣の建物（右と下の写真）。有名なので、観光客が一杯だ。



隣の湾には、ヨットが浮かぶ







帰りの船の時間の都合で、ストックホルムの町中を歩けるのは、わずか4時間余り。そこで、ガイドブックにあるストックホルム中心で歩いて回れるところだけに限定。そして、建物の中の見学も絞った。



旧市街をガムラ・スタンというのだそうだが、ここへも徒歩でいく。最初に出会ったのは、リッダーホルム教会。700年前に建てられた由緒ある教会で、王族の多くがここに葬られているという。



左の写真は『貴族の館』。これまた古い建物のようだ。

このあたりに歴史的に重要な建物が固まっている。

右写真は、スウェーデンの国会議事堂

中写真は、いずれも王宮。

どちらが正面で、どちらが裏なのか、分からないが、双方からの写真だ。

こうしたところの衛兵は、じっと動かないものと決め込んでいたが、道案内もしているし、観光客の記念撮影にも加わっている。



大聖堂は、スウェーデン最古の教会だそうだ。

その隣に、かつては証券取引所だったノーベル博物館がある。入場したが、私の印象には余り残らなかった。



この急ぎ足の見学の最後に、国立美術館に入った。写真は、王宮前から写したもの。対岸の左側の建物の建物

この美術館は、入った価値があった。ヨーロッパ近代美術がたくさん展示されているのに加えて、現代デザインのかかり展示されている。

シンプルで地味なフィンランドのデザインに比べると派手で、洗練さを追求している印象を受けた。



王宮そばで偶然、衛兵交代式に出くわした。音楽隊もあり、立派な演奏をしていた。



帰路につく。港光景。いずれも何万tもの大型クルーズ船だ。これらの船は、ロシアのセントペテロブルグ、



ラトビア首都リガへと向かう。多分、ヘルシンキに向かう私たちの船と同じ会社のものだろう。

別の港には、別の会社のヘルシンキ行きの船が、同じ時間帯に出港する。

船の切符が、そのまま船室の鍵を兼ねている。なかなかの工夫だ、と思う。

出航後、かもめに出会う。

かもめは、多分世界各地の海・港で見られるものだろう。船について飛んでいる。船が餌をまき散らすのか、それとも、船が作る水流が、魚などの餌をとりやすくするのか、そのあたりの事情はわからない。水面から比較的高い位置から急降下して、水面に飛び込み、餌をとっているようだ。



それにしても、素人の私には、飛ぶ鳥を撮るのは難しい。なかば「やまかん」でたくさん撮り、その中からいいものだけを残すやり方。確率10%







ストックホルムの港を出港し、スウェーデンの島々をぬって、クルーザーは進む。そのうち、島々のなかに、太陽が沈み始める。そのシーンの写真を紹介しよう。

昨夜は、ヘルシンキ沖で見た光景だが、今晚は、スウェーデンの夕陽と月。



世界どこでも同じといえど同じだが、違うと言えど違う。

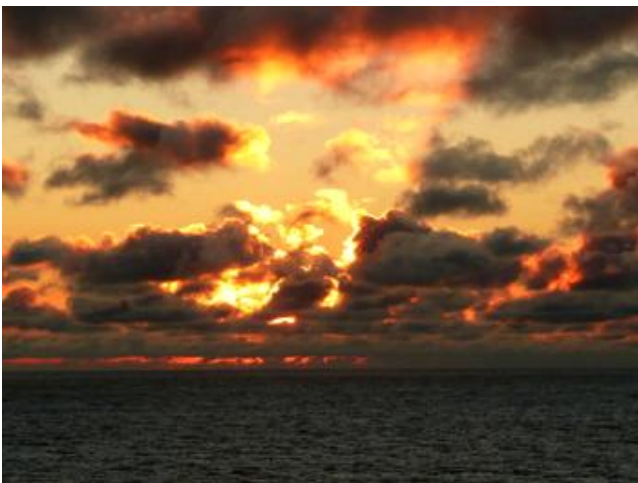
船というのは、さえぎるものがないので、写真をとるには好都合だ。それにしても、夕陽が沈んでしまうと、デッキ上は、人影がほとんどない。私は一人で楽しむ。





翌朝、私は夜明け前からデッキにでた。この時間にデッキにいる人は、私以外ゼロに近い。日の出を「独り占め」だ。海以外にさえぎるものはなし。

ヘルシンキに近づいているが、まだ陸ははっきりとは見えない。



日の出が終わっても、朝日はしばし輝く。沖縄でもどこでもそうだ。日の出の瞬間は、見えにくいことが多く、10～20分後によりやく太陽を確認できることの方が普通だ。この日もそうだった。

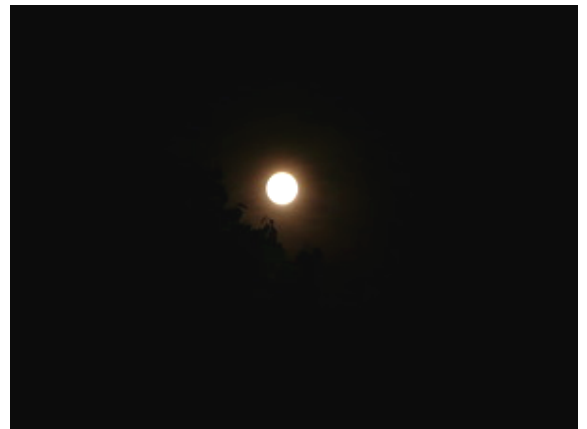
しばらくすると、ヘルシンキ近くの陸・島々も見えてきた。







戻ってきた宿舎でも、朝陽14日月を楽しむ。  
左が朝陽。右は14日月



## 鉄道

写真は、ヘルシンキ中央駅の北にある陸橋から、中央駅方向をながめた風景。  
私には愛らしく感じられる鉄道だ。



## ログハウス展示場

フィンランドのログハウスは、有名だ。歴史的伝統を引き継ぎつつ、デザイン性機能性を追求する現代的志向の中で、それらが一層洗練されてきている。いくつもの会社によって作られているが、経営事情の変化の中で、日本企業に買収された大手企業もあるようだ。

強い関心をもつメンバーがいたので、立ち寄った。日本で言う住宅展示場だ。雨の中だし、季節外れだったのか、他に来客者はほとんどいなかった。展示場を事務所に行っているところもあった。



どのログハウスにもサウナが必ずついている。ログハウスといっても、日本で多くの人がイメージするような、丸太そのままを積み上げるのではなく、丸太を整形して、組み立てていく。なかには、集成材のようにして、なかに断熱機能を持たせるものを入れて、「丸太もどき」をつくり、それで作る場所もあった。

中右写真は、ログを組み立てる仕組みをみせる展示







## 農村風景



ログハウス見学の帰り道、鉄道の車窓からみる農村風景。  
ヘルシンキ郊外で。

## 扉と表札

ポリテク学長会議のある建物の扉は、時代物。貫禄がある。





どの建物も表札の小さいことが特徴だ。権威主義が弱いためかなあ、と推理する。

上左写真は、教育文化省の表札。上右写真は、中央教育委員会がある建物の表札



左写真は、教育文化省の建物

上写真は、教職員組合が入っている建物の全景

下写真は、たまたま通りかかった私立ビジネススクール

余談

トラムで、高齢者が乗って来られたので、席を譲った。「老老席譲り」かな、と思った。

その老女は、隣の席の小学生のゲームに興味を示して、いろいろと尋ねる。日本でも、時々見かける光景だ。





## デザイン見本市

空き時間に訪問した。

大きな会場の入り口がわからなくて、探す。同じような人がいて、その方がフィンランド語で尋ねてくるが、対応不能。

まず高い入場料にびっくり。そして、受付脇にあるコンピュータ登録場で、登録する。そこでできたネームプレートをぶら下げて入場というわけ。登録の際、メールアドレス記入したので、しばらくしてから、フィンランド語のメールが届いたが、これまた対応不能。



上写真は、入り口から会場建物を撮影。  
ここから入ればよかったのに、反対側から入って苦労した。



なかは巨大。ビジネス交渉用の場のようだ。入場したことそのものが間違いだったのか、と後悔するが、会場内の脇道に入ると、美術品・手工芸品展示がある。これまた充実している。市内にある美術館の数倍の規模。量質ともに豊かで、高い入場料以上の価値を感じた。

## 紅葉

撮影は、9月12日ごろだが、すでに紅葉時期だ。





## 変わった競馬

フィンランド地元のテレビ局を見ていると、初めて見るスタイルの競馬をしている。馬の後ろに、小さな馬車をつけて、それに騎手が乗るものだ。騎手は、若い人とは限らない。ベテランたちが多く見受けられた。

勝利した馬は、馬主とおぼしき人と記念撮影をしている。

スタートは、ファジーな感じで、各馬がだいたいそろったという時だ。  
なにか「ほほえましい」雰囲気を感じる。



フィンランド語なので、詳細は不明だが、見るだけでもけっこう楽しい。

テレビ画面を撮影したので、不鮮明になっていて申し訳ない。



## きつつき

宿舎近くのしばしば歩いた森で、出会った。都心からそれほど離れていない場所、ヘルシンキ中央駅から数キロ。副都心になるような駅から1キロ、で出会うなどとは、日本では考えられない。沖縄でもやんばるの森の中ぐらいしか出会えない。

このきつつきは、人を恐れない。10分余りにわたって、至近距離で10数枚撮影。



## 土産物——サルミアッキ

購入してきた土産物の一部を紹介しよう。まずサルミアッキ。これがうまいかまずいかは、議論大いにありだ。昨年も購入してきたが、差し上げた卓球仲間が、インターネットで調べて、「世界一まずい」という情報を見つけ話題になる。今年も、ご希望に応じて差し上げる。私は、まずいとは思わない。結構、おいしい。食わず嫌いな人も食べだすと、結構ハマるようだ。

それに、飴だけでなく、チョコ風とか、柔らかい飴とか、種類もいろいろとあるから、好みに応じて楽しめる。





## ぬいぐるみのムーミン

もう一つは、定番のぬいぐるみ。今年は、孫たちへのお土産ということもあって、ムーミンが中心。しかし、ムーミンを知らない人たちがふえたようだ。

ムーミンカップルもなかなかいい。

## ふくろう

フィンランドでも、ふくろうは人気のようだ。親子のように見えるものは、実は香りを楽しんだり、ろうそくたてにもできる。小さな穴を一つひとつ開けるのは、点描画を思い出させる。

ぬいぐるみ風のフクロウの腹部分の赤いシールには、ここを押せと書いてある。押すと、ふくろうの鳴き声が聞こえる。





## 装飾プレート

手工芸市が、昨年と同じ場所ほぼ同じ日にあり、再度訪問。昨年もであった店が多い。今年もいろいろと買ったが、その一つは、セラミック製の装飾プレートだ。

プレートに水墨画を思い起こさせるようなものが描いてある。



## 花カード

手工芸市では、昨年同様高齢者夫妻の花カードを売っていた。二人で作ったものだ。押し花を何枚も組み合わせで作られている。6枚で、10ユーロとは申し訳ないほど安価。この二人の楽しく充実した、自然とともにある健康生活が想像できる。

## 巨大なしゃもじ

50センチぐらいの、この巨大なしゃもじも、手工芸市で購入したもの。普通のフライパンで使うには巨大すぎる。シーンメイナベ用にちょうどいい。帰宅してから、時々、チャンプルー用に使用している。





## 工芸品

フィンランド旅で購入してきた小物工芸品を並べよう。

小さなカップル人形 ハグしあう配置で販売されていた。



ブレスレットやネックレス



トナカイの人形

再々度、フィンランド訪問するかどうかは、未定。行くなら、季節を変えて、ヘルシンキから離れた田舎に行きたいな、と思う。